
楽譜のない歌たち

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽譜のない歌たち

【Nコード】

N9711E

【作者名】

田中 遼

【あらすじ】

詩集です。シリアスな感じですが、いつの間にやら長くなってきてしまいましたが、連続性は皆無なので気楽に読んでやってください。

時

もてあました数々の詩

腐らせるのももったいない気がして

それでいて公にすることにためらいを感じ

その理由を探ってみると

“李徴”という詩人のように

自分を否定されるのが怖かったりして

情けないとも思っても

一步を踏み出せずに

溜まっていくなげの山

自分を書いた言葉もあり

自分で描いた言葉があり

自分が思った言葉がある

時が来た

封印は秘密を

永遠^{とわ}に封じるためにあるわけじゃない

開かれる時を

開く人を

選ぶために

だから・・・

時は来たのだ

時（後書き）

作った作品を放って置くのもどうかと思い、詩集を作りました。
切ない恋愛を描いた詩、反戦の詩、変化のない日常を嘆いた詩。
バラエティに富んだものをご提供できればと思っています。
どーかお付き合いください。

翼と脚

誰でもいい 誰でもいいから 助けて下さい

誰にも届かない場所の記憶 誰より自由だった頃 僕は空にいた

だけど今 僕は地上にうずくまってる

都会の真ん中 四角い空の下

立ちすくむ僕 泣くことすら出来ず 狭い空を見ていた

傷つき血を流す僕は 誰が見ても負け犬

かつて空に羽ばたいた翼は折られちまった

地面がこんなに冷たいなんて あの青空がこんなに遠いなんて 知らなかった

この翼 傷つけたのは俺の弱さか

それとも世界の闇か はたまたその両方か

どちらにせよ

もう空は飛べない

ずっと昔 僕は助けなど いらなかったのに

誰よりも疾く走った記憶 負けたことがなかった頃 僕は王だった

だけど今 僕はこんなとくに倒れてる

行く場所もなくて 帰ることも出来ず 俯いた僕

痛みだけがここに 胸に残っちまった

痛みにつづくまる僕は 誰が見ても負け犬

かつて地の果てまで駆けた脚はくじけちまった

世界がこんなに冷たいなんて 走れないのがこんなに辛いなんて
知らなかった

この脚をくじかせたのは俺の弱さか

それとも世界の闇か はたまたその両方が

どちらにせよ

逃げ道は断たれた

なくしたのは 自由 手に入れた 数多の敗北

折れた翼を動かしながら　くじけた脚を引きずって　僕は進んでる

この先に　何があるのかすら分からずに

希望は見えない　先には闇ばかり　立ちすくむ僕

今までの全てが　無意味にみえちまった

絶望におびえる僕は　誰が見ても負け犬

かつて過ごした栄光の日々はただの幻

翼は折られ脚はくじかれた　傷だらけ　満身創痍で掴んだ　答えが
それ・・・・・・・・

せめて　それを変えるため　折れた翼で羽ばたくよ　くじけた脚で
歩き出すよ

折れた翼を動かしながら

くじけた脚を引きずって 僕は進んでる

一歩ずつ 一歩ずつ・・・

見上げた空は

雲ひとつない

青い空・・・

片想いの君へ

外の雷

突然の夕立

ぼんやりと下を眺めながら

君は大丈夫かな　なんて思ったりして

確か雷が苦手だったよな　まあもう関係ないか

急に思い出した　君の顔

大概笑った顔しか見たことないけど

こんな日は泣いてるのかな？　雷に怯えてんのかな？

こんなこと　いいたかないけど

たまに君の夢を見るんだ

君と話して 笑ってる夢

ホント笑っちゃうけど

僕の望みなんてそんなもん

好きな人と笑い合えるってのが

ただただ嬉しいんだ

君の目に映った僕

どんなんだっ たんだろ？

道を歩いてる人の傘は 互いにぶつからないような

見事なまでのシステムで 動いてる

雨も雷も 止む気配がない

どっかに落ちたのかな？　　すげえ音がしたけど……

外の雷

突然の暗闇

まだ日が暮れたわけじゃないのに

君は大丈夫かな　　なんて思ったりして

君も嫌いだろ？　　こんな天気は

まあもう関係ないな

急に思い出した　　あの笑顔

他の奴に見せたのと大して変わらない

少し悲しくて切ない

だけど一番みたい笑顔

こんなこと 言いたかないけど

たまに君を思い出すんだ

君と話して 笑ってた頃

ホント笑っちゃうけど 僕はそれがずっと続くもん

終わらない夢だと思ってたんだ

だけどそうじゃなかった

君の目に映った僕 どんなんだったんだろ？

きつとどうでもいい連中の 一人に過ぎなかったはずだ

むしろ嫌われていたかも

今走った稲妻みたく もう見たくもない

そんな存在かもな すげえカッコ悪いよ……

外の雷

突然の青空

まだ嵐は終わってないのに

急に雲が開けて 青空が広がった

君も見てるかな？ この青空を

ものすごくキレイだぜ？

急に思い出した あの夕日

たまたま一緒に見た あのキレイな夕焼け

今の空もキレイだけど やっぱあれが一番なんて……

こんなこと 言いたかないけど

さっきの言葉は取り消すよ

君と話して 笑ってた頃

ホント笑っちゃうけど 僕はその頃のことをずっと

君のことをずっと想ってるんだ 驚くだろうけどね

君の目に映った僕 どんなんだったんだろ？

知りたくもあり知りたくもなし

聞く勇気があればよかった

0%じゃないはず 奇跡があつたかもしれない

今の稲妻は 背筋が凍るほどに

すげえキレイだったな……

外の雷

突然の夕焼け

西の空が晴れ渡ってきた

まるで計ったように

太陽が目の前に

君も見てるかな？ この夕焼けは 現実なのか？なんて……

急に思い出した あの言葉

あんまりキレイ過ぎて 天国を見た気分

そう言って君は笑った

僕も同じ気持ちだった……

こんなこと 言いたかないのは

恥ずかしいのかもしれないな

君が知ってる 僕のカタチは

ホント笑っちゃうけど 仮面と鎧をつけた姿

自分の姿すら思い出せない 惨めな男なんだ

君の目に映った僕 どんなだったんだろ？

マイナス思考に取り付かれて 自分が見えなくなっていた

例えば今日の空みたく 夕焼けが僕を血の色に 染めたとしても

晴れ間は期待出来ない すげえ夕日だけどな……

君の目に映った空 どんなだったんだろ？

地を這うような音の雷

天地を貫く稲妻や

燃えるような西の空

地平線の赤い太陽

幻みたく 目の前に広がってる

僕が独りで見上げた空

どこかで君が見てることを

一緒に感動してくれてることを

この空が繋がってることを

ただ
祈つ
てる

Every

毎朝のこと もう馴れちまった

人ごみに揉まれ 流され 潰される

周り全てが敵になつてゐる

おかしいな ずっと昔はこんなじゃなかったはずだ

少なくとも 隣に一人 味方がいた

周り全てが味方に思えたこともあった

人を救えるのは 人だけという 言葉があるけど
もしそうなら

人を歪めるのも 人だけなんだろうな

毎朝のラッシュアワーが 映す世界

人を押しのけ かきわけ進む この世界は

歪んじやないかい？

毎日のこと だけどどうしても 分からない

何を目指して 生きるのか

何を 秘めて戦うのが

おかしいな ここまで歩いてきたはず 何に向かっていたのだろうか？

ただ進むこと それだけだった

前後の区別なんかは 存在しなかったんだ

人は自分が今 何処にいるかさえ 知らず生きてる

知らないまま 過ごす方が いいのかな？ 幸せなのかな？

どちらにせよ 出来ることは 前に進む

それだけなんだ

目を閉じてみて 深呼吸だ そこからがスタート！

さあ目を開ける！ 今見えたものが君の“前”

向かうのが何処だろうと “先”であることは 間違いないから

迷わず進めばいい

その道を 突き進むんだ

毎日のこと もう馴れちまった

また今日も 一つ以上の 大切な命が明日を見失った

おかしいな ずっと昔はこんなんじゃない なかったはずだ

少なくとも 何かがどっと 込み上げてきた

抑えられない 怒りが

人事じゃなかったのに

人が人のことを 傷つけることが ただそれだけでも 罪なんだと

人は気づいている

皆知っているのに

毎朝聞こえるニュースが 伝えるのは

今日の嘆きと　その先の闇

この世界に　希望はあるのかな？

毎日のこと　そろそろ馴れても　いいころだ

だけど　いまだに　絶望に怯え　希望を捨て切れない

おかしいな　ずっと昔はこんなじゃなかったはずだ

少なくとも　俯かないで　ただ前を見て

明日じゃなくて　今日の　今この時を生きてた

人と人が出逢う　それだけで奇跡　僕達はそれに気付けないで

それ以上を　期待して　明日を待っている

今この時を生きることすら出来ない　僕らの日々に

僕らの明日に

信ずるべき 希望はあるのかな？

さあ始めよう！ 今希望が見えないからと 目を伏せてどうするんだ！

変える時はきた

希望がないなら その手で作ればいい

君の手は そう出来るから

そのために ここにあるから……

モザイク

昔々

僕の思い描いた未来図は

目の前にある絵のように はっきりと見えていた

誰よりも成功した あの偉人よりも

伝説となった あの戦士よりも

高く昇ってやると 意気込んでいた

僕は自信に溢れてた

ところが心が大人に近づくと 夢を諦める手段を覚えた

“無理だ”とか“真面目に考えろ”とか言う 周りの雑音が気にな
ってしまった

しまいには自分が自分を信じなくなっていた

“俺には無理”が口癖になってしまっていた

夢を見ろというくせに

僕らの夢を否定する奴らに 迷わされていたんだ

僕は僕の人生を歩くのが 僕であることを 忘れて生きていた

モザイクのかかった未来図は よく見えないけど これだけは分かる
そこに立っているのは

僕だ

昔々

僕の思い描いた未来図に

誰かが入り込むことは けっしてないことだった

誰かを誰より信じるということが

誰かを誰より愛するということが

不思議でしよがなくて 一生縁のない物だと思っていた

ところが心が大人に近づくと

段々とその意味が分かりかけて そしてまた分からなくなってしま
った

縁のない物ではなくなったけれども

不思議はいつまでも不思議なんだと

今 気付いた

理解出来ない だけど どこかで知っていること

僕は君を愛してる　ただそれが言えたなら

きっと何か変えられたはずなのに

僕は僕自身の気持ちに　気づくことが出来ず　ただ首を傾げてた

モザイクのかかった未来図は　よく見えないけど　これだけは分かる
僕はけっして独りじゃない

モザイクのかかった未来図に　映っているのが

成功を手にした僕とは

君と一緒にいる僕とは

限らないけど

そこにいるのは

そこに立っているのは

僕だ

今は昔

今は昔

夜には闇が 支配した

人は光を 温もりを いつでも求める

月は冷たく 星じゃ足りない そう言っ

人は火に しがみつ

それでも

忘れちゃいけない

事がある

炎がくれる 祝福と 呪いとを

燃える炎が 奪う命を 壊す物を

その力を

光が闇を濃くし

火が温もりを掻き消すことを

手に入れた分だけ 何かが消える そのことを

忘れないで

今は昔

夜には闇が 支配した

人は光を 温もりを いつでも欲しがる

闇に怯えて 明かりがいると そう言っ
て

人は灯を手に入れた

それでも

忘れちゃいけない

事がある

明かりが点り 消えるものがあることを

数多の星が 光を失い 星座達は 力尽きた

科学が神秘を消し

“ 進歩 ” が闇を濃くすることを

そのことを

忘れないで

街灯が

地上の広告が

電球が

宇宙の神秘を 隠してしまう

レグルスの囁きを

シリウスの歌を

ヘラの祈りを

忘れないで

退屈な日々

なんでだよ どうしてだよ

なんで俺が生きてんだよ どうしてまだ生きてんだよ

死にたくなる 毎日

とりあえず 退屈

トーマス・エジソンは発明家になるために 生まれてきた

マイケル・ジョーダンバスケットをやるために 生まれてきた

エジソンの発明は人々の生活を変えた

ジョーダンのプレイは人々の夢を支えた

俺は？ 俺には何ができる？

多分 俺は悪役のいない ヒーロー物の主人公

誰も必要としない 力が余った 厄介者

何になるため 何のために 生まれてきたのだろう

恐らく

俺は生まれる場所と時間を 間違えたんだ

ここじゃないどこか 今じゃないいつか

俺の意味が転がっている

なんでだよ どうしてだよ

なんでまだ死んでないんだ？ どうしてまだ生きてんだよ

変化がない 毎日

とりあえず 退屈

アレキサンダーでも 死ぬときは その最期は 独りだった

坂本龍馬でも 自らの 最期は予期 出来なかった

大王の遠征は人々の世界を広げた
龍馬の力がこの国の未来を作った

だけど あいつらは死んじまった

夢の 途中だったはずなのに 英雄は逝ってしまった

誰も逃げられないんだ 何を持っても 皆が死んだ

何になるため 何のために 死んでいったのだろう

恐らく 俺は倒れる場所も時間も 選べはしない

ここかもしれない 今かもしれない

俺は何一つ遺せない

なんでだよ どうしてだよ

なんで俺は生きてんだよ どうしてまだ死なねえんだ

探している 解答

見つからねえ 気がした

スーパーヒーローは 絶対負けちゃいけない それが掟

あの英雄達は 勝ったけど 負けてないわけじゃない

なあそうだろ？

ヒーローは当然のように世界を救えるけど

英雄達は道半ばにして倒れていく

きつと これからもずっとそうだ

俺は 道を選ぶことさえも ままなららずに死んでしまう

誰も逃げられないから 何しても無駄と 諦めてる

何になるため 何のために 生きてそして死ぬのか……

俺達 生まれたり死ぬ場所も時間も 選べはしない

ここがベストとか 今しかないとか

俺は何一つ選べない

選択肢があるとしたら

自分で死ぬか他の何かで死ぬか

意味に悩むか

無い物ねだりをやめるか

ただ それだけのこと

俺自身 進んでるはずだったのに

俺の歩みは 回し車を 回してるだけだった

前がどこかも 知らないままに 坂を転がる

進む先が前だなんて 信じる気はないけど

方向を変えられないなら

そう思った方が幸せかもしれない

なんでだよ どうしてだよ

なんで俺は生きてんだよ どうしてまだ生きてんだよ

まだ未来はあるけど

とりあえず

退屈

今も生きているけど

とりあえず

退屈

ちよつと真面目な唄

騒がしい教室の中 笑い声と一緒に ちよつとした怒鳴り声 平日
の学校の休み時間

誰かが飛ばした 輪ゴム鉄砲

人に当たって 床に落ちる

それと同じ気軽さで 銃の引き金が引かれ 命が吹き飛ぶ

そう 同じ星の上で 今日もまた 人々が争ってる

尊い命が 明日を奪われた

騒がしいテレビ番組 笑い声と一緒に ちよつと冗談じみた 話題
で視聴率を稼いでる

どうでもよ過ぎる スキャンダルとか

レベルの低い バラエティーとか

それと同じ気軽さで 死者の数を口にして “知った顔” をする

そう 同じ星の上で 今日もまた “仲間” が死んで行くのに

俺達はずっと 目を逸らしている

騒がしい道の真ん中 笑い声と一緒に

ちょっと真面目な歌を 名前も知らない誰かが歌ってる

誰かが飛ばした 汚いやジ

的を外れた ただの喚き

とりあえず、こちら、変化なし

分かってるよ　これで最後だ　だけど笑って手を振るよ

また会おう　バイバイ

未練はないよ　ただたまに　会いたくなる　きっとそうなる

ほんの少しの　期待を混ぜて　人波を　見回すために　背伸びをし
てる

そのせいかもな　ほんの少し　背が伸びたよ

変わったのは　その位

痩せてはないし　太りもしてない

髪の毛だって 黒いまま 手をポケットに 突っ込む癖も 治って
ないし

何より 想いが あの日のまま

未練はないよ ただたまに 会いたくなる 今でもそうだ

ほんの少しの 期待を混ぜて 人波に 君を探して 歩いているよ

そのせいかな ほんの少し 拳動不審（笑）

変わったのは その位

考え方は そう変わらないし 価値観だって 変化無し

性格なんて 成長ゼロで 笑える位

何より 想いが あの日のまま

ほんの少しの 期待を混ぜて 人波で 声を待ってる 君が呼ぶ声を

そのせいかな ほんの少し 耳が冴える

変わったのは その位

可能性が あるとこ限定 片耳だけに イヤホンで

音は控えめ 笑える位 準備万端

いつでも 君を 待ってるから

The End Of A Day

今日もまた 今日が 終っちまった

夢はあるのに そこに向かって歩き出せずに

こんなところで 足止め食ってる

言い訳ばっか 上手くなってくんだ

全部人のせいにして

全部自分のもんにして

結局全部 失った

夢を求めて 明日に手を伸ばしてみるけど 幻は掴めない

手を伸ばすより 足を動かすんだ

なんて言っではみるけど

出来ないから ここにいるんだ

今日もまた 今日が 終わっちゃった

夢があるのに そこに向かって 走り出せずに

道の途中で 迷子になってる

逃げ道だけは 知っているんだけど

全部忘れたふりをして

全部知った顔を作って

結局全部 失った

夢に迷って 明日に心をさ迷わせても

幻は掴めない

未来図なんて 当てに出来ないんだ

なんて言ってはみるけど

それくらい 分かるんだ

今日もまた 今日が 終わっちゃった

夢の在りかは 皆知ってる

知ってるけど

ただそこまでの 道が分からない

知ってる振りで たどり着いた今

全部から逃げたくて

全部捨てられるとほざいて

ホントに全部 失った

夢のためだと 明日も見失った今

幻さえも映らない

この手の中に 何を掴めるかな

なんて聞いてはみるけど

掴みたいと 思った記憶さえ

今日もまた 今日が 終わっちゃった

、 10年10月20日 本文を修正しました。

P r a y

“ 唯一の真実は 祈っても無駄なことさ ” 彼はそう言う

“ 神様なんて 信じない ”

彼は今 夢を捨て “ まともな ” 道を選んだ男

でも 思い出してみろよ ずっとずっと 昔

ただただ 信じてた “ 神様はある ” そう信じてた

あの頃は この空も あの海も 今よりずっと 綺麗なものに 見えていた

そうそれだけで 十分だった

そうそれだけで 夢も希望も 神様も 信じられた

“あの頃はまだガキで 夢だって 信じてたから” 彼は笑った

“馬鹿だったのさ 俺達は”

彼は今 23 時間は7時前というところ

でも あれをみてみるよ ずっと向こうの 東に広がる あの空に

誰かが描いた 絵が浮かんでる

あの頃は 朝焼けや 夕焼けに 心が動き ふと気づいたら 泣いていた

それだけで 素直になれた

そうそれだけで 過去も未来も 神様も 信じられた

“ 神様がいるんなら なんでまだ 何も起きない？ ” 彼のつぶやき

“ 平和が来たり しないのか？ ”

彼は今 昨日見た ニュースを思い浮かべたところ

でも 考えてみるよ ずっと昔の 誰かの台詞

“ だからって 神以外には 不可能だ ” って

あの頃は 夢を見て 暮らしてた “ 世界を変える 変えてみせる ” と思った

“それくらい 簡単だ”とも

そうそのくらい 自分を信じ 人間^{ヒト}を 信じていた

“信じちゃダメなのかな？” 僕の質問

“夢はいつかは 叶うって”

僕は今 何よりも 夢追い人になりたい男

でも やっぱ不安は つきないもので 悩んでしまう

“俺の道は これでいいのか？ どこにつく？”って

けど今 目の前に ある道に 光が見えた 導かれてるかのよう
に

それだけで 迷いは消える

そうそれだけで 明日も夢も 神様も 信じて行ける

そして今 目をつむり 問い掛ける

世界はどこに向かうのでしょうか？

そして俺は その中で 何が出来ますか？

その問い掛けを 皆が考え始めた時に 銃声が止む

そして答えを 全ての人が 見つけたら 世界は変わる

変えられる

そう信じてる

少しだけ、一緒に、歩いてほしい

君が目の前に現れた時

僕は何を言えるんだろう

何が言いたいんだろう

分からないけど はっきりしてることもある

どうしようもなく 君に逢いたい

卑怯だとは分かってる でも

また会った時 目を伏せてすれ違う位なら

友達のまま 一緒に居たい

そんな弱さが 二人の距離を 広げてしまう

もしも 月と地球の引力が もう少し弱かったなら

二つの距離は 途方もなく 広がっていた

何億年か 光のように走れたら 君の背中が見えるかも

そんな思いを 膨らませ

今日も秒速10メートルの 電車の中

光の速さで走れたら……

微妙なところだけど でも

また会えること それだけは信じてる

もう一度 あの頃のまま 笑いあいたい

そんな願いが 不確かな“僕”を 繋ぎ止めてる

もしも 月の光が 強力で 星を消すようだったなら

歌なんか 生まれなかった 作れなかった

何億年も前に宇宙で歌われた 星達の歌

今まさに その歌声が

僕の心を強く震わせ 何とか今に^{ここ} 保たせている

何億年か 光と共に走れば

君の背中が見えるかも そんな風には思っけど

今日は秒速1メートルで ゆっくり歩く

星達の歌が聞こえる

君が目の前に現れた時 僕は何が言えるだろう

この胸の内を全部吐き出せるなんて 思わないけど

伝えたいことが、あるんだ

天気雨

晴れた空から 雨がぽつりとくるような突然さ

急にあの娘が まぶたの裏に 現れた

あの頃と おんなじような とてもかわいい 笑顔が見れた

そういえば クラスメイトで 良い友達で それ以上では なかつたはずだ

それなのに なんだろう この気持ち 胸のざわめき 高鳴る鼓動

ただふつと 思い出したただけなのに あの頃は “ただの” 友達だったのに

急に降り出す 天気雨

晴れた空から 雨が降ってくるよりも摩訶不思議

急にあの子が どうしてるのか 気になって 気になって

この心から 胸の奥から 何かが溢れる

ここまでの 俺はいつでも 言いたいことも 言わないままで 溜め込んできた

それなのに この思い 心の喚き 壊れた堤防

ただちよつと 流れ出ただけなのに いつの間にか 飲み込まれ溺れてる

急な嵐は 誰のため？

荒れた空には 晴れ間なんか ある訳無い あるわけないのに

急に目の前に 見えはじめた 青い空

それが今 空一面の 雲を押し分け 広がっていく 空一面に

そつえば これは狐の嫁入りだっけ？ 雲が消えても 雨は止ま

ない

そう君が いなくても 君への想い 消せもしないから

ただもつと 楽なものだと思ってた “忘れる”という 選択肢

急に溢れる 胸の内

天気雨なら すぐに上がると ずっと思ってた

でも今も 君への想い 降り続けてる

急に降り出す 天気雨

ずうっと続く 天気雨

きゅうしゅうせい……

希望への航海

期待に胸膨らませ 帆に風を受け生まれ育った港から 大海原へ漕ぎ出した

あれから時が経った 百日を数えた辺りから 日にちが分からなくなり

とうに着くはずの港は影さえ見えない それどころか 今は陸地さえ見失った

昼には日差しと熱が 夜には闇と寒さが 僕を襲う

水はそこら中にあるのに 飲めなくて 魚がいることは知ってるけど 捕まえる術がない

でも 飢えより 渴きより 心を蝕む絶望が 僕を苦しめる

遙か昔に 思えるあの日 あの町を後にしたあの日

何か求めて 帆を張ったのに

どうしても 思い出せない 旅の理由が 行きたかった場所がある 輝きが

偽の灯台 幻の陸 思わせぶりの雲 何もない無人島
真の絶望 冷たい恐怖 心にかかる闇 光が見えない空

それでも 絶望の海原を 今日船が渡っていく

期待外れの 大風と 予想以上の荒波達に 揺さぶられ 沈みかけ
てる 僕の夢

あれから時が経った 出港の日には見えてた空 蝕まれた心には
何も響いちゃこねえんだ

星なんて もう見えない それどころか 今じゃ太陽さえ疑ってる

風には 動けぬ苦しさ しけには沈む恐怖が 僕を襲う

この大きな海の上では 僕なんて ホントにとるに足りない存在
藻屑みたいなもんだ

そう事実が 真実が 心を蝕む 絶望に 倒されかけてる

遙か昔に 思えるあの日 あの街を後にしたあの日 何か光を 目
指してたのに

どうしても 思い出せない

星達の唄 風が奏でた曲 もう聞こえない

それでも 光を探し求め 今日船を漕いで行こう

偽の灯台 幻の陸 思わせぶりの雲 何もない無人島

真の絶望 冷たい恐怖 心にかかる闇 光が見えない空

それでも 希望を抱きながら 今日も船を漕いで行こう

いつか見える大地を

いつか昇る太陽を

いつか掴む夢を

信じるんだ

薄汚れた世界で

祈れ！ 絶望の中で

叫べ！ 嘆きの中で

他に何ができる？

ゴミ溜めのような世界 救いのない日常

俺達はただ 抜け出すことだけ考えてる

同情してる余裕はない 俺自身 泥の中

自分のことすら 救えないのに 一体誰に 手を差し延べると言うんだ？

世界中が泥まみれ

誰かが言う

“ 明日なんて 今日と同じか より酷く変わるだけのこと

期待は失望に 希望は絶望に 変わってく

いつでも いつだって そうだった

それだけは これからも 変わらない”

祈れ！ 絶望の中で

叫べ！ 嘆きの中で

他に何が出来る
？

どうにもならない世界 希望のない日常

俺達はただ 足掻いてるだけ

強情に 変わることを 否定して

愚かにも 自分一人だけ 救われることを 祈ってる

目を閉じ 耳を塞いで 悲鳴とは無関係の振り

目を覚ませ

明日のこと 今日は見えない それこそが 俺達の希望

期待と希望で ポケットを一杯にして 先へと 未来へと進もう

それだけは諦めちゃいけない

だから顔を上げる 俺達にもう俯く理由は 存在しない

滑稽な程 純粹に未来を信じて

進めばいいんだ

祈り続けて 願い続ける

救われることじゃなく

歩きつづけることを

自分を信じるってことを

祈れ！！

2009年6月26日　くMJに捧ぐく

夏の始まりの朝

一つのニュースが駆け巡り

一つの時代が終わった

彼が歌った　彼が踊った

そんな彼が　死んだ

誰だって　彼の名前は知っていて

一度位　彼の歌を聞いたのに

今日もまた 人の流れは 流れていく

かつて世界を制した男が 空に消えたと言っのに

それすら毎日の噂話の一つに過ぎない

時代の終わりの朝には 少し口が動くだけ

何も変わらず 日々は過ぎていく

たくさんのスター達

誰もが最後は眠りにつく

そして僕自身も

彼は歌った 彼は踊った

そして彼も死んだ

誰でも 二百年後には死んでいて

名前なんて 忘れられてるはずなんだ

今日もまた どこかで誰かが 覚めない眠りに ついていった

かつて世界を制した男でも ただの影に変わってしまい

しまいに消えていくんだ

歴史のページに 名前を残せない僕らは より早く消えていくだけ

何事もなく 日々が過ぎていく

夏の始まりの朝

一つのニュースが駆け巡り

一つの時代が終わった

彼が歌った 彼が踊った

そんな彼が死んだ

時代の終わりにも

何事もなく

人は流れていく

2009年6月26日　くMJに捧ぐく（後書き）

サブタイトルで大体分かっていただけたとは思いますが、これはマイケル・ジャクソン死去のニュースを聞いて作った詩です。

授業を片耳で聞きながら、ノートに書き殴りました。すぐに出来上がり、さあ帰って公開するぞ！と意気込んでいたのですが、この日に限ってノートを学校においてくるという大失態（・・・；）

今日ようやく公開できたのですが・・・

タイムリーな詩なんて作ったことなかったから、多少落ち込みました笑

まあ、人生そんなもんですよね？

では、次の更新まで

（＾　＾）／さよならく

P.S.

題名を少しいじりました。こっちのほうがしっくり来る気がします。

10.1.29

カチマケ カミキレ

賢く生きようと頑張る方々

学歴

収入

外見

そんなことを追い掛けて 気がつけば

人生は勝ち負けに変わってた

“勝ち組”の奴が言う

“金で買えないものはない”

“負け組”の俺が言う

“金より大事なものがある”

何故だか知らないけど ヒトはみな

ただの紙切れを信じてる

賢く溜め込んでいる方々

金が全ての勝ち組たち

そんなことを目指し 気がつけば

人生を誰かに吸い取られていた

あちこちで声がする

“どこで間違えたのだろう”

開け放した窓の向こう

“そんなことより、ここはどこだ？”

なんだかわからないけど ヒトはみな

同じところを回ってる

おもちゃを欲しがっても

手に入れた瞬間に 飽きてしまつて

新しい何かに手を伸ばす

そんなループを ヒトは続ける

勝ち組が言った

“欲しいものはなんでも手に入る”

負け組は尋ねる

“それじゃ貴方は幸せなんだな”

答えはなかった

何故だか知らないけど ヒトはみな

ただの紙切れを愛して 信じて 手に入れたがる

その代償が何であっても……

虹（前書き）

“虹”は、先日東京の空に広がった二重の虹を見て、書いたものです。“見た！”という方、いらっしやいませんか？

ホントに凄かったですよ！

あまりに綺麗だったので、こうして詩を書き、こんな蛇足な前書きまで書いてしまった次第です。

では、楽しんでいって下さいませ。

田中 遼

虹

天気予報の女子アナが 梅雨が明けたと 嬉しそうに言ったのは

確か一昨日

ところが空は 一向に晴れてくれない

君の右手を にぎりしめてた 僕の左手

温もりだけが まだ残ってる

それを消すため 忘れるための

夏を待ってる

手を伸ばしても届かない 君の背中に 一体何を言えば良い

確かに君と手を繋いで 春を過ごしたはずなのに

梅雨は終わって 雨は上がって 空は開ける はずだったのに

続く春雨 さよならの雨 夏の村雨

そして 光が 雨上がりの空を駆け抜ける

世界で一番 美しい橋 七色の輝き それが今 空に輝く

君はあの二重の虹を 見てますか？

君の街でも この奇跡は起きてますか？

雨は止んでも 梅雨が明けても

君はもう 戻らない 奇跡は起こらない

だから虹の向こうの 夏を待ってる

きっと何かが 僕を待ってる

今夏が 始まりを告げ

動きはじめる

結局、「奇跡を……」とこの「虹」は分けることにいたしました。

まあ、前々からやろうとは思っていたのですが、いろいろとあつて（正直、面倒だっただけです笑）、今日になりました。

ま、こちらのほうが見やすくて良いですね？

では。

田中 遼

光のカケラ

埃だらけの夢

輝きをなくした希望

部屋の片隅 育つ暗闇

それでも僕は 目を逸らす

あるものを磨きもせず 輝くときを待っていた

消えた光を 探してた

部屋の隅 目を逸らした闇

僕の心が 失った意味

埃まみれの My Dream

輝いていた あの時

この手いっぱい夢達が 今にも空に 飛び出そうと

この手の中で暴れていた

一体何が起きたんだろう

順番に 一つずつ 息絶えていく

夜の街 窓の明かりが消えゆくように 一つずつ

今 夢が指の間をすり抜ける

ただ一つ 残ったものも 冷たくなった

薄汚れて ボロボロの 僕の夢

手にとった 瞬間に“それ”の鼓動が 響き始める

飛びたい！ 飛びたい！

僕の場所はここじゃない！

空の向こうに 僕は行ける……

その声は僕の声 心の想い

いくつもの 希望を 夢を 殺してきた ぶち壊してきた

いつだって そういつだって

希望が死んだ時

夢が途絶えた時

僕自身の手が

僕自身の心を

バラバラに してきたんだ

今抱えてる 震えるカケラ

もう閉じ込めは

封じ込めはしない

例え途中で 息絶えらとも

この空を

この広い大空を

羽ばたかすんだ

そう決めた時

窓の外

空の向こうに

新たな星が

一つ 灯った

貴女に捧ぐ

貴女は僕に 微笑んだ 貴女の声が昔のままで 余計悲しくなったんだ

痩せたのを 病院食のせいにして 笑ってたけど

貴女は昔から 嘘をつくのが とても下手だった

お願いだ 強がらないで

このままじゃ泣いてしまうよ

声がかすれた

貴女はとても 辛そうだった “ 貴方にだけは 見せたくなかった ” って

お願いだ いかないで 僕の願いはそれだけなんだ

どんなことでもしてあげる

だからお願い いかないで

貴女のママが言っただよ

貴女は僕を待ってただけで 会えた後すぐ 貴女が空を駆け登るって 分かってたって

貴女はあの瞬間^{とき} 生きていること自体が 奇跡だったらしいね

ごめんよ でも貴女との 約束は 果たせない

ほら見てよ 涙がとめどなく 流れてく

止められる訳がないんだ

今でも 貴女がそばにいるような 気がする

どこかで生きているような気がするんだ

だけど貴女はいつてしまった

涙の痕を 風が撫で 俯く僕に 光がさした

風の中 僕の中 光の中に 貴女が見えた

ありがとう 貴女がくれた 全てのことにお礼を言っよ

ありがとう そして さよなら……

半分フィクションですが、半分はノンフィクションです。どのあたりが本場で、どのあたりが創作なのかはあえて書きません。

世の中、知らなくていいこともあると思います。

ぼやき

日が昇り　そして沈んでいく

そして一日は　僕たちを擦り減らして　過ぎて行く

良いことなんか起こらないし

悪いことだけ積み重なって　遥か高くに　そびえ立ってる

あゝあ　全部後ろに置いていけたらなあ

まあいいや　明日は来るさ

日は昇り　昨日を置いていく

そして僕たちは　明日のことばかり　気にして生きている

そういえば　昨日の僕は　今日の僕に　希望を託してた

なのに僕はもう明日に全てを託してしまった

あゝあ 一体なにをやってんだろ

まあいいや 間違っちゃいないさ

日は昇り 僕たちを置いていく

そして全ては取り残されていく

あゝあ 一体俺に何が出来る？

まあいいや とりあえず 頑張って 追い掛けるかな

それともいつそ 違うどこかに 走ってみるか

どっちにしても 明日はあるさ

それだけは 間違っ てないはずさ

文字数合わせの代わりに、コメントを書きます。

前回の“貴方に捧ぐ”。後書きで伝えたかったことが全く伝わって
ませんでしたm(――)m

あれは、（実際にあった出来事は、こんなに深刻な出来事じゃない
から）“知らなくていい”と言いたかったんですが………

いやはや、余計なことは書かないほうがいいのかもしれない。

とか何とか言いつつ、“ぼやき”にもコメントしますw

これ、結構前に書いたものなんですけど、今まさに、こんな思いで
す。

“昨日の僕は今日の僕に希望を託してた”

“なのに僕はもう明日に全てを託してしまった”

もし私が、この瞬間に息絶えたら、後悔しか残らないでしょう。

でも、“僕”も私も、どうしたらいいのかわからないまま、“昨日”を振り返り、“明日”を追いかけて、“今日”に置いていかれるのです。

そして今日も、“なんとかしたい”と切望しながらも、結局また24時間を使い切ってしまいました。

この繰り返しの中、ぼんやりと不安を感じる、今日この頃です。

光一粒 風一陣

ほんの少し前 薄暗い雲の合間で 青空が輝いていた

一陣の風が 分厚い雲を 斬り裂いた痕 確かにあれば 現実だった

そう僕達が見た光 確かにそこに 空にあった

幻だと人は言う 世界はそれほど美しいもんじゃないと

でも信じてみて 世界は思ったより 見所があるって

知ってるだろう？ 雲の向こうには 何処までも青い空が続いてるんだ

風は起こせなくても 感じることは出来るから 僕たちは空を見上げてるんだ

ほんの百年前 空の星々は 今よりずっとずっと 輝いていた

それは僕らが星に願って 物語を紡いでいたからかもしれない

いやきつとそうだ

そう僕たちが忘れた歌が 確かに消えてしまった

馬鹿げていると人は笑う　世界はそんなにロマンチックじゃないと
でも見上げてみて　微かに残る光には　確かに物語があるから

聞こえてるだろ？　微かな微かな光の粒が　静かに静かに歌う唄

ほとんどが失われても　全てが絶えた訳じゃないから　僕たちは空
を見上げているんだ

信じてみて　雲の向こうに　空の果てには　きっと何かが

信じてみて　そこに僕らは　手を伸ばせる

風を起こせなくとも　光が見えなくとも　感じることは出来るから

だから僕らは信じるんだ　空を見上げるんだ

私は基本的に感覚で生きている人間です。
友人には否定されるんですが、少なくとも、そうなりたいと望んで

います。

だって、ややこしい説明とか、難解な公式なんかは、何かを理解するためにあるんですから、感覚的に理解できてればそれで十分じゃないですか。

そう考えているせいか、人に何かを説明したり、教えたりするのは大の苦手です。

“最初っから言葉だけで全部伝えるのは不可能なんだ”なんて言いながら、小説家を目指しているんだから、困ったもんです。

E p p u r s i m u o v e

どうすればいい？ このもやもやは 間違いなく貴方のカケラ

消すことも 目を逸らすことさえ出来ない

哀しい恋を引きずるのが弱さなら 強くなれる気がしない

終わった夢を諦めるのが強さなら そんな力はいらない

どうしたって 諦められるはずはなく 足掻いて溺れていくんだ

それでも 地球はまわっていく

どうしようもなく この絶望は 間違いなく育っていった

消すことも ごまかすことも出来やしない

ヒトの優劣を計るだけの知恵なら 消えてなくなればいい

後ろのことを言い訳にするくらいなら 全て忘れてしまいたい

どうしたって 俺は弱いままでも もがきながら沈んでくんだ

それでも また朝が巡ってくる

哀しい恋を引きずるのが弱さなら 強くなれる気がしない

終わった夢を諦めるのが強さなら そんな力はいらない

どうしたって 俺は弱いままでもがいて足掻いて溺れていくんだ

それでも そうだとしても

^{せかい}
地球はまわっていく

久々の更新です。

なんとなく、やる気がおきず、滞ってしまいましたf(^^;)

この“E p p u r s i m u o v e”というタイトル。ガリレオ・ガリレイが言った“それでも地球は回っている”という言葉の元です。イタリア語なんですが、正確な発音も知らないまま、タイトルに使いましたw

何があっても、どんなに悩んでも、そんなことは関係なく地球は回っている、朝はめぐってきます。

それは希望であり、同時に絶望でもあると思います。

Once Upon A Time

昔々、あるところに……

お伽の国が　すぐ側に　あつた頃
別の何かも　すぐ側に　僕らの側に

晴れ渡る　この空に　夢の形の雲を探した

ささやかな　夢達を

笑顔　喜び　ありつただけの幸せ
寄り添う二人　心踊る歌

全てがきつと　手に入る　そう信じてた

描くのが　簡単過ぎて　その距離が　その価値が　見えてなかった

お伽話が　僕を苦しめ　追い詰める

一番初めに　抱いた夢に　憧れに　手が届かないってこと
皆ホントの“夢”だったこと

そんな事実を　紛れも無い　真実を

知ってしまったんだ

お伽の国が　すぐ側に　あつた頃
別の何かも　すぐ側に　僕らの側に

晴れ渡る　この空に　夢の形の雲を探した

ささやかな　夢達を

笑顔　喜び　ありつたけの幸せ
寄り添う二人　心踊る歌

全てがきつと　手に入る　そう信じてた

あまりにも　そばにすぎ　君のこと　その価値が　見えてなかつた

誰かの歌が　僕を苦しめ　追い詰める

一番初めに　愛した人に　その腕に　手が届かないってこと
“さよなら”が絶対だってこと

そんな事実を　歌った歌　そんな歌を

誰かが歌ってる

お伽の国が　すぐ側に　あつた頃
別の何かも　すぐ側に　僕らの側に

笑顔 喜び ありったけの幸せ
寄り添う二人 心躍る歌

いつまでも いつまでも 幸せに……

この詩はかなり前に書いたものです。自分自身のイメージとかなりのギャップがあり、結構気に入ってます。

前に小説に書こうと思った台詞がありまして、どの小説に書こうとしたか定かではないんですが、内容はよく覚えています。

“ファンタジーは人の夢なんだ。だから否定すべきもんじゃない”

正直、“全員幸せ。めでたしめでたし！”というお話はあまり好きではありません。

現実から離れすぎた“幸せ”には意味がないと思うのです。

でも、日常にささやかな奇跡が起こる。そんな夢物語は信じていきたいと思っています。

M f a i m e

小さな子が 指さして笑う 大人達も おもしろがってる

シャッターをきる音 TVカメラも“彼”をうつす

狭い檻の中 ぐるぐると歩き回る 金色の影

虚ろな目が 見ているのは 太い格子なんかじゃない

檻の中で 生まれ育った 風のおいを 知ること出来ない

でも彼の目は 草原を見ている 空の彼方を

閉じ込められた 若き王

お前の中に 流れる血は 草原の覇者 自由を纏い 天に吠えた王者のもの

見世物にされ 見世物として 死んでいく

自由を奪われ 手なずけられて 牙は折れて しまったのか

無限に続く その歩み 同じ所を歩き続ける

その顔を上げる お前はまだ 声を失ってないから

吠えてみせる お前の声を 聞かせてくれ 轟かせるんだ 王者の
誇りを

笑った奴らに 教えてやれ

檻の中でも その牙は 折れてないこと

虚ろな目は まだ死んじやいない

遠くを見つめ 空の色に染まつただけ

閉じ込められた 若き王 まだ折られちゃいない まだ死んでない
まだ吠えられるから

顔を上げてくれ お前は王なんだから

“M f a l m e”とは、スワヒリ語で“王”という意味です。

ちなみに“ライオン”は“S i m b a”。

正直、“S i m b a”って題名にしたかったんですが、あまりに知られ過ぎてるんでこっちにしました。

でも、名前も含めて結構気に入っている一作です。

さてさて、“時は戦国”の後書きに書いた“うれしい事”、ここで自慢しちゃいますw

実は、先日、京都学園大学人間文化学会 “ケータイ学園文芸賞” というのに応募しまして……

“優秀賞”！！（ー）v

大賞は逃したけど、自信にはなります！

これから、これまでにがんばっていきますので、よろしく願います！

田中 遼

似顔絵

大掃除の途中　がらくたの間に　見つけた　一枚の色紙

名も知らぬ　画家の卵が　描いてくれた　僕の似顔絵

十年という　でかい区切りに変わる寸前

その長い　時を経て　再び見つめ合う僕ら

絵の中の　小さな僕は　珍しく真面目な顔をしてるけど

やっぱり目は輝いているんだ

死んだ目をしてる　今の僕と違って

なあ何が違うのかな？　分かってるのは　たった一つ

あの頃の夢を　僕は諦めて　手放して　見失ってしまった

大体十年前　この似顔絵の頃　いつでも　笑っていた

何よりも　希望や夢が　どんな時にも　輝いていた

十年近く 時が流れて ちょっとだけ背が伸びた今

時を経て 再び見つめ合う僕ら

絵の中の 昔の僕は 真つすぐ 真つすぐこつちを見てる

僕がなくした 輝きを秘めた瞳で ただ僕を見つめてる

なあ何を見てるんだい？

教えてくれよ

君には何が 見えてるんだい？

僕には何も見えないよ

答えてくれよ……

似顔絵って言うものは、なかなかすごいものだと思いませんか？

写真や映像と違って、描いた人から見た自分が見えるわけですから、うまいかどうかは別にして（オイ）、結構貴重なもんでしょう。

さてさて、詩の中に書いた、“見つかった似顔絵”。

お気に入りだった黒い帽子を被って、えらく真面目な顔をしている自分が可笑しいのと同時に、出来ればあんな頃に帰りたいなあと思ってしまう。

ま、そんなことを言ったら、あの頃の糞生意気な自分に馬鹿にされることは、分かっているんですがねえ……。

意味

昨日は何してたんだっけ？ 何となく覚えてんのが けだるさだけ
もううんざりだ 誰か助けてくれ

無意味な日々 無意味な人生

死にたかないけど 生きてる意味が分からない それだけのこと
つまんねえことばっかだ 一瞬でもいい 楽しい何かをくれ

今日の空は 重た過ぎる 息苦しい程の曇り空

どいてくれよ 頼むから 光が見たいんだ

風も吹かない 雨も降らない 曇ったまま 日がさすこともない
立ち止まったままなのに 時間だけ過ぎていく

勘弁してくれ

中途半端な天気よか 嵐になった方がマシなんだ

明日は何しよう？ 馬鹿馬鹿しいや

今日も半端なこの俺が 明日を気にしているなんて 笑えてくる

心の中は曇り空　そもそも光はあるのかな？

分厚い雲の向こうを見れたことがない

風を待つてた　立ち止まったままで

待ちくたびれて　走り出した時　風が吹き始めた

簡単なことだったんだ

俺の生んだ微かな風が　頬を掠める

蝶の生んだ風が　海を越えて　嵐になるなら

この風は何処で何になるのかな

確かめに行こう　意味なんてないけど　知りたいから

今　生きる意味が分からないなら

後で　生きた意味を探せばいい

さあ風を追い掛けるんだ

きつと 何かが生まれている

僕らの知らない何かが

生まれているはず

人生で3番目ぐらいに書いた詩です。

作った後で、ミスチルの“未来”という曲に良く似たフレーズがあることを知りました。

強調しておきます。“作った後で！”です。笑

ところで、詩の中に書いた“蝶が生んだ風”。

確か中国の故事かなんかだったと思うのですが、さなぎから孵った蝶の最初の羽ばたきで生まれた風が、海を越えて嵐になったという話から引用してみました。

私の言葉が、私の知らないところで、何かになっているかもしれない。

そう思って、書き続けていきたいと思います。

Wandering World

世界が 僕らを置いて 変わろうとしている

皆が必死に 後を追いつけてるけど 果たして それで良いのかな

行き先を知っているのは 行き先を決めているのは 誰だ？

答えられないのに 皆が走り出す 皆がいく それだけの理由で

“頭”がないのに “身体”だけが動きつつける

そんなのが 僕らの姿

先頭に 誰かがいれば いい訳じゃない

皆で考えるんだ

どこに行くのか 何故走るのか

考えるんだ

世界が 今明らかに 道に迷っている

皆が必死で 道を探しているけど 果たして 見つかるものかな

道から外れちゃったのは 道から逸れちまったのは いつだ？

答えられないのに 道を見つげられる 訳がない

少し待ってみよう

草が倒れてる それで道があると信じてる

そんなのは 迷った奴の痕跡で 道じゃないんだ

なあそうだろ？

自分で考えるんだ

どこに行くのか 何故迷ったか

考えるんだ

迷った世界についていても どこにも辿り着けない

なあそうだろう？

道連れに なることはない

考えるんだ

よく、長い行列を目にします。

本物ではなく、人気があるもの（と、いうか、人が多いところ）に群がる人の多いこと多いこと。

自分が間違っているのかと、本気で考えてしまうこともあります。

でも、自分で考えずに流されるだけでは、大事なものは掴めないと思うのです。

「人気が高いから」ではなく、「良いと思ったから」で選んだものに、間違いはないでしょう。

少なくとも、「自分」を見失わずにすむという点で、ずっとマシだろうと思います。

自分で考える。そして、思うとおりに生きる。

そうできれば良いのですが……。

Where Are You?

街の喧騒 人の談笑

外側のざわめきが 内側の静けさが

孤独を 悲しみを さらけ出す

ねえ 君はどこだい？

こんなに探しているのに どこにもいないなんて

本当に君は現実なのかな？

あの日々が夢だったなら こんな想いはしなかった

こんなに孤独じゃなかったのに

通り過ぎた輝きは 僕の胸に突き刺さる

交通渋滞 小さな期待 夜の街を歩く

君の世界と僕の世界

将来どこかで重なるのかな？

ねえ 君はどこだい？

こんなに求めているのに まだ見つからないなんて

神様が引き離しちゃったの？

もしそうでも 諦められるはずもなく

まだ君を探してる まだ奇跡を信じてる

よだかみたく僕も 星に向かっていきたいな

ねえ 君はどこだい？

こんなに求めているのに まだ見つからないなんて

本当に君は現実なのかな？

あれが本当に 夢であつたなら

こんな想い しなくてすんだのに

光の名残はまだ ここにあるんだ

「よだか」とは、宮沢賢治の小説「よだかの星」の主人公のことです。

今この詩を読んでみて、「ここによだかを登場させるのは唐突過ぎるだろう……」と思ったのですが、あえてそのままにしました。

夢だったなら、と思う現実があり、現実になれば、と思う夢を見ます。

それが、自分が今を生ききれていないことの現われのような気がして、どうにも歯痒さを感じます。

国境の向こう

見ているんだろ？ 聞こえてないのか？

苦しむ子供等 彼等を狙うハゲタカ 何故誰も助けないんだ

誰かを待っていて 動き出さない人々 誰もが偽善の涙を流してる

可哀相なんて 口に出すだけ 差し延べる手もないくせに

助けたいなんて 涙を拭って 一体誰に言ってるんだ

国境の向こう 当然のように 向けられた銃口

たった今 引き金を引いた彼は 昔家族を撃たれた男

生きて ここにいて 価値も忘れ ため息だらけ

いつちよ前に悩んでる

どうして僕らは気付けないんだろう？ どうして満たされないんだ
ろう？

聖人ぶっても 理想を語っても 自分を捧げはしない偽善者

国境の向こう 同じ地球の上 そう同じ人の声 この命の鼓動

知ってるはずさ

痩せこけた少女の僅かな希望

聞こえたはずさ

死にかけた子供のはかない祈り

気付いたはずさ

奪われた者の微かな光

見ていたはずさ

瞳に秘められた輝きを

僕には世界は変えられない 彼らを救うなんて 驕りもない

愛の意味さえ見えない僕に 彼らの痛みなど知るよしもない

ただ 確かなことが一つ

国境の向こう 今もまた 向けられた銃口

引き金が引かれた時 吹き飛ぶのは 僕らと同じ 人の命

消えるのは 一つの光

マイケルジャクソンの“Earth Song”と“Man in the Mirror”、それにミスチルの“タガタメ”を聞きながら作りました。

どんなに悩んでも、自分ひとりでは世界は変わらない。

誰かを救えるほど偉くもない。

そんな自分に出来ることといえば、こんな詩を、こんな言葉を、書き続けていくことだけなのかもしれません。

ガラスのカケラ

ただの飾りだと分かってた　たいした価値はないと気付いてた

ガラス玉の輝きが　僕らの日々を色どって

壁越しの温もりが　僕らを包んでた

僕らは役者であって　観客だったね

お互いが「理想」を　「幸福」を演じ合う舞台

空しさには目をつむって　踊り続ける二人

そんな虚構はやはり　呆気なく壊れてしまつて

部屋の中　無数に散らばった破片

尖ったガラスは　切っ先を僕に向けた

君はこの部屋を出る時に　一体いくつの傷を負ったんだろう

あの敵意の塊は お互いの心から出たカケラ

君にもやはり 牙を向いたはずなんだ

直せはしない そんなことは分かってる

それでもカケラを集めはじめた僕

指が痛くても 血が流れても

僕はまた一つ 破片を拾い上げる

どうせなら もっと粉々に

カケラも残らないくらいに壊れてしまえば 傷つかずにすんだのに

また一つ 傷が増えたよ

僕が間違ってるのかな？

壊れてしまったものなんか さつさと捨てるべきなのかな？

でもまた一つカケラを拾う

僕はセロテープの 絆創膏のつぎはぎが

傷そのものより

痛々しいことを知った

自分で言うのもなんですが、どーしようもなく暗いですね
；
（

時折、こーいったものを書きたくなるのですが、自分でも驚きです。
笑

よく、「詩とか小説は実話を基にしているのか？」ということを聞かれるのですが、どうにも答えにくいですね。

実話といえばそうであるような気はするし、完全な虚構といってもいいような気がします。

まあとにかく、「こういつたことを考えた」ってことは事実です！

多分、何の答えにもなってないでしょうが、そういうことで。笑

ハンパモン

誰か教えてくれ 僕に一体何ができる？

こんな半端な僕に 意味はあるのかな？

なにもかも 出来ない訳じゃない 全て「中の中」

言っなりや「友達以上の恋人未満」

そんで全てに振られてしまった

必死にならなくても それなりに生きられる そんな風な奴だから

こんな足踏みをするんだろうな

誰か助けてくれ 僕はもつとしっかり 遠くに イキタイ

半端もんの癖に 描くものだけ大きいんだ

なにもかも 僕が変えてやる

そのために僕がいる

さもなくば 僕は何のために生まれたんだ

何のために生きてるんだ？

必死で言い聞かせても 誰より自分が疑っている

その言葉は 空しさを増すだけで

誰にも出来ない 僕だけの意味が欲しい

それが奢りだと 分かってるのに

未だに 望み続けているんだ

いやはや、二日にわたるセンター試験、ようやく終わりました。

まあ、結果は気にしないことにしましょうf(^| ^;)w

もっと遠くへ行きたい。もっとしっかり生きたい。

でも、やっぱり時間を浪費してしまいます。

いつの日か、「あれも全部、ここに繋がってたんだ」と思える日が来ればいいのですが……。

今のところ、後悔と疑問しか残っていません。

「全てがいい思い出になる」なんて、本当なんですかねえ？

A M E M O R Y

一人きりでいる夜

寒さに負けそうな時

僕はいつかの二人を思い出す

寒空の下に二人

寄り添って歩いた時

一瞬だけ触れた肩

白い吐息が混じった声

今されそうな記憶の中

君がいる過去へ

また少し あの日が遠ざかったのに

また少し 君を想う時間が増えて

また少し 苦しくなってしまうんだ

闇が迫ってくる時

悲しみに漬されそうな時

僕はいつかの君を思い出す

見つめ合う二人

どこまでも晴れ渡る空の下

微かに曇った笑顔 切な過ぎた一言

優し過ぎた温もり もう戻れないMEMORY

もう少し 僕が大人だったなら

もう少し 君と一緒にいられたのに

また少し 苦しくなってしまうんだ

一人きりの夜

胸が締め付けられる時

君を思い出す僕

優し過ぎた温もり もう戻れないMEMORY

最近の傑作です。笑

一息で完成させたように記憶しています。

これとは別に、友達とのメールの流れで閃き、思わず相手に送ってしまった言葉があります。

「未来より過去が欲しいなんて笑える」

笑えるんだか笑えないんだか。

過去が美しく見えるのは、「もう戻れない」からなのかもしれませ
ん。

寄せ書き

いつか貰った お別れの色紙を取り出して

皆の言葉を見ていた

色んな奴がいたなあ なんて ちよつと浸つてたりして

センチメンタルな言葉を見つけた

なんてことない台詞なのに 何だろう ひどく苦しい

「また会おう」なんて

お前とはあれから会ってない

ただ 夢を追いかけて 追いかけて

走り出したと聞いた

今どこにいるかは 知らないけど

成功を 幸運を祈ってるよ

一人一人を思い出させる 別れの言葉

色んな奴の 色んな想いを見た気がした

かわいいあの娘の言葉が見つからなくて

探し始めて思い出した

黒く滲んだ一行に 君の名前が見えた気がした

塗り潰したわけじゃなさそうだけど

かすれた文字はとても読めない

何を書いたの？

この染みは何を言ってるの？

なんだか切ないね……

でもその黒い染みに

僕の欲しかった言葉がある

そんな気がして

嬉しくなるんだ

義務教育の間、三回ほど転校を経験しました。

大半の奴らとは、その時別れたつきり、会っていません（まあ、当然かもしれませんが）。

手紙をくれた奴にも、全く返事をせずに終わってしまったたりf（
| ^ ; ）

久々に「寄せ書き」を取り出してみて、「あいつら、一体どうしてるんだろう」と思ったりしています。

サヨナラゲーム

九回の裏 一点差 ノーアウト二塁

誰もが息を殺して見守る中 打席に入ったのは

僕じゃなかった

守備固めで ベンチに下がった 四番バッター

彼はどんな思いで 試合を見ていたのだろう

グラウンドをじっと見ている彼は

仲間を信じるしかない

どんなにドラマチックな話でも

自分が主人公じゃないことを 知ってしまった

九回の裏 一点差 ツーアウト満塁

誰もが手に汗握る場面 打席に向かうのは

僕じゃなかった

誰よりも打席が回る一番バッター

でも 僕はこの場面に 選ばれなかった

どうすることも出来ず

勝負を見守るしかない

どんなに自信があっても

打席にいない僕に　ホームランは打てない

チャンスをもえなかった男は

ヒーローになりそこねた

どんなにドラマチックな場面でも

打席にいない僕に

ホームランは打てない

そういえば

チャンスをもらった八番バッターは

初球を振り抜いた

ボールはどこまでも 飛んでいった

この詩は、友達と話をしている時に思いついたものです。

その内容というのが、「あの娘は“ストライク”か“ボール”か」という真に馬鹿な内容だったのですが（意味、分かりますよね？w）、二人して散々「暴投」だの「危険球」だの言い合った後で、気付いてしまったわけです。

「俺たちは、打席に立ってすらいないんじゃないか!？」ということ。苦笑

残念な話です。

僕らのリアル

ガードレールに寄り掛かって 流れる街を見ていた

ヘッドライトは 眩しいけれど

照らして欲しい場所は暗いまま

誰か教えて欲しい

光の当たらない場所に

花を咲かせる方法

命を見出だす方法

街のあちこちに 生きながら死んでいる人達

僕もまた その一人

戦って負けた訳じゃなく

戦う前に投げただけ

勝者にはなり得ず

負け犬と呼ぶべき代物

誰か知ってるかい？

僕はどうすれば良かったのかな？

なにかもが もう遅い

カッコイイ敗者にはなれず

勝ちのビジョンは見えない

八方塞がり行き止まり

でかいゲームの後 ふと上を見ると

薄汚れた天井に 不思議なくらい 人の影が映っていて

ぼんやり見とれてしまったんだ

誰か知ってるかい？

あの影とこっち側

どっちがホントの現実なのかな？

僕にはどうしても分からない

生まれて死んで 生まれて死んで

繰り返すだけ

影と何が違うって言うんだ

生まれて死んで 生まれて死んで……

天井に映る影が 僕らのリアル

「戦う前に投げただけ」の勝負があります。

いつも、いつでも、きっちりけりをつけることの出来なかったものばかりが、目の前をちらつきます。

とはいえ、そこに帰る道があるわけでもなく、後悔している間に次の「勝負」が行き過ぎてしまうのです。

どうしたら良いんでしょうかね……？

青い空

風が吹いた時

見えやしないのに

行方に目をやる

空の向こうの空にある

見たことのない何かが

見える気がしたから

いつの日かなんて

むなしでそのまま

空を見てるんだ

空に放つた願い

きつと叶うと信じてた

どんなに強く願っても

空を飛べるわけではないのに

あの空の向こうにあるのは

やっぱり退屈な世界なんだろうか

鳥が空を横切っていく

僕らにはない 彼らの宝

何物にも変えられない

自由という名の翼

人には遠すぎて 届かない空

そこは彼らの場所

空の向こうが 素晴らしい場所とは限らない

それでも人は空を見てる

風に心をのせ

想像の翼で羽ばたいて

そうやって

人は生きていく

空に放った願い

きつと届くと信じてた

無邪気過ぎたのかな

放った小鳥が帰るはずもないのに

あの空の向こうにあるのは

やっぱりただの

退屈な世界なんだろうか

やっぱりただの

青い空なんだろうか

「手の届かないところにある葡萄はすっぱい」

負け犬ならぬ、狐の遠吠えですが、実際どうなんでしょう？

どうせ届かないなら、「あれは素晴らしい物なんだ」と思っていた
ほうが上を向いていけるような気がするのですが……。

上を見すぎて、足元の小石に躓く羽目になりそうですけどね。笑

二人の奇跡

この広い世界の片隅

偶然の出会い

運命の二人

君がいて 僕がいて

突然舞い降りた魔法

一目惚れなんて馬鹿にしたのに

目があつた瞬間

生まれた直感

二人はこの時のために生まれた

運命なんてものがあるとして

それは二人のための輝き

奇跡だと君は言うけど

今ここに二人がいる

それは変わらない景色

君の道

僕の道

全ては「今」に通じていた

そんな気がして

全てが意味を得て

輝き始める

二人の信じる未来 ファンタジーみたい

だけど叶えたい

だから祈るんだ

君がいる今を忘れないように

明日も君の隣にいれるように

いつまでもこう祈れるように

奇跡だと君は言うけど

それでもいいから一緒にいて

ずっと変わらない景色

奇跡だと君は言うけど

今ここに二人がいる

それは変わらない景色

これは確かな 奇跡

これは紛れもないフィクションです。笑

って、そうだと相当「痛々しい」……？

じゃ、実話ってことで！（オイ）

これは「RADWIMPS」の「ふたりごと」の歌詞を知ったすぐ

後に書き始めました。

それから、小田和正の雰囲気も混ざってるかな？

自分で、こんな「幸せ一杯」の詩が書けたことに驚いています。笑

眠らない街

朝との境目が迫る頃

赤い目をこすりながら

大通りをゆっくり歩いた

昨日少し飲み過ぎて 頭が重い

でかい思いを抱いてこの街にきてから

ちょうど十年

そろそろ むなしでで生きること

疲れてきたんだ

一緒に夢を追いかけてきた仲間達

昨日も最後まで

誰も諦めちゃいなかった

でも それでも

僕は手を放してしまった

お前ら 絶対諦めんなよ

絶対に未来は開ける

僕にそれを待つ力がなかったただけなんだ

頑張れ

負けんな

最後に歌った 応援ソングを思い出しながら

夜明けの風の気配に身を委ねてた

眠らないこの街で

一体いくつの夢が

音も立てずに

崩れ去ったんだろう

眠らないこの街は

夢を見ない

ここにはただ リアルがあるだけ

人は夢をなくしては 生きられないから

この街が 冷たく見えるのかな

でも人は 夢の中では 生きられないから

この街で 光を目指すんだろっうな

一方夢を捨てた僕は

夜が明けて

本当の

空しさを知るんだ

「眠らない街」とは、「東京」です。

東京に住んでいて、「ここ」にサクセスストーリーが落ちているとは全く思えないのですが、それでも、かたくなに夢を描いています。

「成る」かどうかは別にして、「何か」にはなると信じて……。

街の灯

友達と別れた後

暗い電車の窓

僕は一人きりで

「彼」と向き合った

街の灯を背に

浮かび上がった暗い顔

さっきまでの

「笑い」の仮面も

いつの間にか

剥がれ落ちていた

通り過ぎる

あの街を 歩くことなど

もうないけれど

忘れられない想いが

そこにあるんだ

大音量のイヤホン

流れるのは悲しい響き

僕は一人きりの 放浪者なんだ

美しい旋律に乗って

聞こえる優しい声

問い掛けるように

諭すように

語りかける

通り過ぎる あの手かり

届くはずもないから

ただ輝いているだけなんだ

手にしたカードは

ハートの10

簡単には捨てられず

切り札には出来ない

でもそんなカードでも

勝負しなきゃならない時もあるんだ

行き過ぎる あの街を 歩くことなど

もうないけれど

あの輝きは 忘れない

暗い電車の窓

僕らがいた痕

行き過ぎる街

この中で「僕」が聞いているのは、The Eaglesの、「Desperado」です。

この曲を知らない人は、ぜひ聴いてください。

そして、出来れば歌詞も調べて、なんとなく頭に入れて曲を味わってみてください。

真冬の夜、街中を走る電車に乗りながら聞くと、心臓が締め付けられるような思いがします。

押し寄せる波

ここにいる時

見えない流れが

僕を追い立てる

先へ先へと 転がるように

でも僕は行きたくなくて

流れをさけて

歩こうとしたんだ

道を探してさまよう僕に

襲い掛かる荒波

逆らおうとした訳じゃないのに

人々は僕を敵と見なした

誰であろうと

異端者を許さない世界

僕は沈み始めた

生きている限り

人がいて

彼らが僕を追い立てる

前へ前へと 突き飛ばすように

でも僕は 迷ってしまって

流れに負けて 溺れかけてる

助けを求めても

降ってくるのは 嘲弄だけ

流れに逆らう強さより

波に乗っかる軽さがほしい

誰しも強い訳じゃないだろ

賢しく生きて何が悪いんだ

弱い癖に 重たい僕は

ただ沈んでいくだけ

でも

強さがあれば

迷うこともないのに

そんなことを考えている

「流れに逆らう強さより 波に乗っかる軽さがほしい」

どちらもないから苦労するんですね。笑

強けりゃ強いに越したことないんですが……。

今は溺れかけてますね。苦笑

穴あき四次元ポケット

輝いていたのは僕が 世界が

昔々 僕は幸せだった

毎日新しい幸せが降ってきて

その上いつも一つ一つが 生き続けて

僕のポケットで 暮らしてた

でも知らないうちに そこに穴が空いた

何をやっても

誰と話しても

破れたポケットからは

何も見つからない

出てこない

過ぎ去ったあの日々は もう戻らない

昔々 僕のポッケは4次元で

いっぱいになることはなかった

それでも僕は 満たされていた

でもいつからだろう

何もないところばかりを見はじめた

幸せと幸せの 隙間に目を向けた時

四次元は四次元でなくなつて

ポケットもポケットでなくなった

そして全ては 失われる

なくしたもののばかり 気にするのはやめたいのに

僕が見ているのは 後ろばかり

穴あきの ポッケの中に 手を突っ込んで

僕はまたとぼとぼと

歩き出すんだ

「僕は世界一不幸な少年だっ！！」

のび太君の名台詞。

ドラえもんという、超ジョーカー的な存在を手に、何を言ってるんでしょう。笑

まあ、これは極端な例ですが、似たようなことはたくさんあります。自分が不幸だと思うより、幸福であることに気付くほうがよっぽどいいと思うのですが……

それがとてつもなく難しいような気がします。

スベキコト

「逢いたい」なんて

ありきたりな言葉を並べ

何か出来ると思ってた

何か変わると思ってた

生きるべき時

いるべき場所で

一人きりになったとしたら

人は留まることが出来るだろうか

孤独に耐えられるのが

最も強い人だと聞いた

一体どこに そんな人がいるんだろう

想像も出来ない

「寂しい」なんて

一人で呟いてみるだけで

何か分かると思ってた

何か変わると思ってた

知るべきこと

学ぶべきものが

目の前に溢れ返っている今に

本当に手にすべきものは何だろうか

愛を手に入れた人が

最も幸福なんだと聞いた

一体どうすれば 君に伝わるんだろう

想像も出来ない

「愛してる」なんて

届くはずもない言葉なのに

何故か頑なに

君の心に響くと

信じてるんだ

言つてきくと

伝えるべき想い

ありふれたものが

こんなにきらめいて見えるのは

何故だろうか

星は届かないから

美しいんだと聞いた

一体どうすれば

そんな言葉を忘れられるんだろう

想像も出来ない

「逢いたい」なんて

ありきたりな言葉を並べて

何か出来ると思ってた

何か変わると思ってた

この詩もまた、中島みゆきの「たかが愛」に似たようなフレーズを
発見しました。笑

「参考にした」わけでもなく、たまたま似ていると、なんだか悔し
いような、がっかりなような、そんな気分になります。

ここて一首。

何となく、
案外に多き気もせらる、
自分と同じこと思ふ人。

石川啄木

流石です。笑

U t o p i a

部屋中に散らばった パズルのピース

作り始めて やつと気づいた

きりがないつて

何ピースだ？

どんな形だ？

一体どんな絵が出来るんだ？

そんなことすら知らないで

一人で部屋で うずくまってる

一つずつ 拾ってみては

ぴったりとはまるピースを探すけど

見つからなくて

また投げて

別の一つに手が伸びる

端っこを見つけると

偉そうに諭されもした

でも 見てくれ

どこにもないんだ

そうこれは

手掛かりゼロの 超難関パズル

誰一人解けたためしが無いはずで

誰にも解けるはずがないもの

だけど解かなきゃいけない気がしてる

部屋中に散らばった パズルのピース

何が出来るか

まだ見えないけど 進歩はあった

何ピースか

どうにかペアが ぴったりはまり

一応何か

形が出来る気がしてる

だけどまだまだ 先は長そう

一つずつ

合わせてくしかないけれど

はまるピースは 一つだけ

この部屋中に 散らばった

ピースの中の

一つだけ

端っこにつづくまり また次のピースを捜す

ふと思った

何かに似てると

そう何か

手掛かり0で

ややこしい問題

誰一人解けたためしがないもので

誰にも解けるはずがないもの

だけど解かなきゃいけないものなんだ

世界がパズルだとして

一つ一つのピースは 僕達で

そこに出来る絵は ユートピア

それぞれがそれぞれの居場所を見つけ

無駄も余りも

上も下も ない世界

いるべき場所に

僕らがいれば

きっと見えてくる

だから探しつづけるよ

誰かの隣にある僕の場所

僕というピースのはまる場所

たった今 合わさったこの二つが

君と僕なら いいのにな

そんなことを思いながら パズルを続ける

今、世界が歪んでいるのは、人が「いるべき場所」に
か「いたい場所」に いないからではないでしょうか。 という

全ての人生に「意味」があるとしたら……

それぞれのぴったりはまる場所が、どこかにあるはず。

この「世界」という「パズル」が完成したなら、そこはまさに「理想郷」^{トピア}。

そう、信じています。

WRIST CUTTER

死にたくない

嫌だ

生きたい

だけど世界が

それを拒んだ

立ち止まった僕に

空のしかかってくる

僕は蟻のように

潰されてしまうんだ

見捨てられた奴は

野垂れ死ぬのがオチ

傷ついた魂は

同じような身体を求めた

闇の中で 独り

取り出す カッター

かさぶたの下

脈打つ 命

死んだ目の代わりに

手首から流れた涙

不安を痛みで

塗り潰そうとして

身体をなぞる刃

傷つきながら生きるのは

僕のせいなのか？

不安に襲われる夜

命を見失った時

世界に拒まれた男は

何をすればいい？

僕がにぎった答えは 正しくなんかない

でも他に一体どうすればいい？

誰も教えちゃくれないから

こうするしかない

どこにも行けぬまま

また今日も

叫べない唇の代わりに

傷が口を開くんだ……

どうしようもなく暗い気分なので、どうしようもなく暗い詩を公開する事にしました。

題名を見ての通り、「リストカット」が題材です。

どうでしょうか？笑（　こんなこと聞くのも初めてなんですがw）
テーマが重いだけに、「知った気になっているのかもしれない」と、
少し不安になっています。

ご不快に感じられたらすぐに消しますので、ご指摘ください。
よろしくお願いします。

田中 遼

奇跡を……

たいしたこともしてないくせに 時々 毎日に疲れちゃうんだ

そんな時 ここじゃないどこかに行きたくて

それでも 動き出すのも億劫で

そんな時 君に逢いたくなるんだよ

そんな時 僕は柄にもなく 空を見上げて

神様に祈ってるんだ

神様 お願いです たった一度

生涯に一度きりで十分です

俺に奇跡を

奇跡を下さい

たいしたことのない僕だけど 一度位 奇跡が起こること願ってる

こんな時 君に逢いたくなってるんだ

こんな時 心の中が疼き出すんだ

苦しいよ 助けて下さい

こんな時 僕は暗い部屋で うずくまって

神様に叫んでるんだ

神様 お願いです 俺を救って下さい

この苦しみを除く奇跡を

奇跡を下さい

君に逢いたくてたまらない

だから 柄にもなく 空を見上げて

神様に頼んでるんだ

神様 お願いです ほんの一瞬

生涯に一度きりでもいい

俺に奇跡を

奇跡を下さい

どうか奇跡を

奇跡を下さい

まさに「苦しい時の神頼み」。

「Season」で、翔太に言わせようとした詩です。

実際、翔太はこんな心情だったんじゃないかな、と思います。

と、まあ微妙に宣伝してみるわけですが、完結させたのに感想も評価も来ないことに幾分ショックを受けています。

やれやれ、こんなもんなんですね？

まあ気が向いたら、感想やら評価やらをいただけると嬉しいです。

あ、もちろん、「楽譜のない歌たち」もどうぞよろしく。笑

田中 遼

素直な唄

部屋の隅 一人きり ギターを抱え

平凡なラブソング 作っていた

「君に捧げる」なんて 恥ずかしいけど

まさにそのために

奏でる音

まさにそのために

ここにある唄

カッコつけ

飾り立ててる

この僕が

素直に素直に

想うこと

まっすぐまっすぐ

想う君

だから

素直に まっすぐ

伝えたい

「好きだよ」

「愛してる」

「そばにいて」

ずっとずっと

僕のそばに

誰もが耳にした

スターの奏でるラブソング

僕にはとても

似合わないけど

まさにそれこそ

望む音

まさにそれこそ

僕の憧れ

少し気取って

異国の文字を並べても

みつともないほど純粋なこの想い

ただひたすらにまっすぐな この気持ち

伝わらない

「好きだよ」

「愛してる」

「そばにいて」

もっともっと

君を愛させて

名曲なんて 作れない

かつこよくなんて 唄えない

ただ 素直に まっすぐに

「好きだよ」

「愛してる」

「そばにいて」

「きつときつと 幸せにする」

ただ それだけの唄

先日、友達に誘われて行ったライブハウスで、一番最初のバンドが一番最後に歌った曲（どうにもややこしいですね。笑）を聴いた時に思いついた詩です。

一番始めに思いついたフレーズは「カッコつけて アルファベットを並べても この想いは伝わらない。」、というものだったのですが、作っているうちにそのフレーズが消えてしまいました。f(^ ^)
| ^ ;)

いやはや、それにしても、「作曲」という偉業（俺の意見です。笑）を成し遂げられる人がうらやましい。

誰か、この「詩」を、「歌」に変えてくれませんか？

と、一応頼んでみることにします。笑

輝いている君へ

驚かないで

君はいつでも 輝いてるよ

君は認めないけど

君は素敵なんだ

だから俯かないで

胸を張って

自信を持って

人とは多分

内側から 輝くもんで

君もそう

君のなかから

光輝く

見えない魅力

だから 素敵なんだよ

自信信じて

君は絶対 掴むはずだよ

みんな知らないんだ 君は思ったより強いって

だから止めようとする

だけど僕は

背中を押すよ

夢を追う分

人より少し辛い命に なるかもしれない

けれども多分

君はやるべきだから

背中を押すよ

この世界には

優しいことだけじゃないって 君は言っけど

だからこそ

優しく生きていこうって

思うんだ

忘れないで

君はいつでも 輝いてるよ

君は誰より 素敵なんだよ

君はなんでも 掴めるんだよ

忘れないで

僕がそばにいるよ

はい。

「かなり恥ずかしい詩だなあ」なんてことを思いながら載せています。

「だからこそ 優しく生きていこうって 思うんだ」

これ程までに、自分に合わない台詞もないかな、と。笑

だからこそ掲載に二の足を踏んでいたわけですが、出来としてはなかなかだと思っています。

ま、やっぱり、こそばゆい気もするんですがね。笑

S o m e t h i n g

ただただ歩いてきた

薄明かりの中

日の出の瞬間を待っていたんだ

何となく明るく見える方に

一歩一歩を

踏み締めながら

求めていたのは

「ゴール」なんかじゃなかった

何かを掴めれば

何かになれば

それで良かった

自分にも

何かが出来るはずだと

自分にも

何かをやれるはずだと

夢に手を伸ばしていた

でも

まだ

日は昇ってくれない

ほんの少し

ほんの少しだけ

芽生えた疑惑

このまま夜が明けなかったら？

このまま光が届かなかったら？

目を凝らせても

僕にはもう

明るくなりつつあるのか

暗くなりつつあるのか

それさえ分からないんだ

僕には「何か」なんてなかったのか

僕はやっぱり

何者でもなかったのか

答えてくれる人はない

薄暗い

昼と夜の境

一体どちらに変わるのか

僕の持っている

「何か」

僕の中にある

「何か」

それがなんなのか

まだ分からないけど

とりあえず

今

太陽が

夜に

闇に

打ち勝った

実のところ、まだ日の出は見れていません。

薄明かりは見えているような気はしているのですが、また少し暗くなつたような気もしています。

自分に「何かSomething」がある。

そんな淡い希望を抱き、西か東かも分からない地平線を見つめ続けている毎日なんですが……。

朝焼けも夕焼けも、綺麗なことには変わらない。

なんて独りで呟いていたりもします。

田中 遼

A d r e a m

冬の冷たい空気の中

“ずっと眠っていたかった”

そんな風に 思いました

僕の未来に

君がないことも

君の世界に

僕がないことも

分かってる

分かってはいる

そう だから

こんな叶わぬ夢を見るより

悍ましい悪夢の方が

ましなんだ

恐怖と共に

飛び起きたとしても

胸がしめつけられる ことはなく

込み上げるものもない

すぐ別の

夢を見れる

忘れられる

すぐそこに

君がいて

君と笑って

幸せになる

リアルだけど

叶うことはない

夢でした

冬の冷たい空気の中

“ずっと眠っていたかった”

そんなことを 思いました

僕の視界に

君がいたとしても

君の夢には

僕の姿はない

そのくらいはわかってる

そう だから

これは

届きそうだけど

永遠に叶うはずはない

夢なんだ

体中が震えだして

涙が溢れて来た

胸が痛んで

生きるのも嫌になった

夢の中の幻に

君の姿を

見ただけで

ただそれだけで

すぐそこに

君がいて

君と笑って

幸せになる

そんな切なく

淋しい夢が

覚めました

もしかしたらと

外を見ても

“もつと眠っていたかった”

なんてことを 思っただけで……

僕の期待は

虚しいものだけど

君の言葉には

君の笑顔には

君の姿には

きつと力がある

何よりも

強い力が

そう だから……

なんだかんだで五十個目の詩です。

一応（？）節目なので、どの詩を持ってくるか迷いましたが、結局、「なんとなく」で選びました。

「冬」なので季節は違っし、作った時期も2、3年前でタイムリーでもなんでもない。

本当に「なんとなく」、です。

ま、この詩集自体が（そして作者自身も）そんな感じですので、「

これでいいんだ!」、とも思います。笑

田中 遼

昨日見た夢（前書き）

昨日見た夢

夕べ突然

夢にお前が現れた

名前も一瞬出てこなかったのに

一緒に飲むのは違和感なくて

なんか笑えた

別に親友でもない

特別仲が良かった訳でもない

何もかもが正反对だった

でも

嫌いじゃなかったんだ

妙に遠いあの頃

俺もお前も

まだまだガキで

諦めを口にしながら

まだ来ぬ未来に

期待を抱いて向かっていた

走り出していたんだ

誰もが夢を描いた

あの頃

たまたま近くにいた

それだけの仲

でもだからこそ

懐かしくなる

会いたいのは

お前と

あの頃の俺

夢の中でお前は

疲れたように笑っていた

今の仲間と同じように

一体何なんだ？

空はそんなに重いのか？

目指した場所が

のしかかってくる今

飛び立つ間際に羽をもがれた雛鳥

どこに向かえば良いんだ？

誰か教えてほしい

妙に遠いあの頃

俺もお前も

ただ知っていた

足が折れても 腕をなくしても

進まなきゃならない

翼をもがれても 目が潰れても

諦めちゃいけないんだ

誰もが夢を見ていた

あの頃

今よりずっと

何も知らなくて

今よりずっと

見えていたものがあつた

会いたいの

お前と

あの頃の俺

目覚めた後

思わず打った

お前宛てのメール

でも

何か違う気がして

今もまだ

送れずにいる

おかしなもんで、最近よく「あの頃」の夢を見ます。

「帰りたい」なんて言っていたのは今に始まったことじゃないのに、それに最近じゃ、「諦め」を口にする、なんてこともしなくなりました。

自分が素直になったからなのか、それとも本心では諦めてしまったからなのか。

ともかく、あの頃とは違うんだなあ、なんて思ったりしています。

昨日見た夢（後書き）

「夢」が続いてしまいましたが、この詩はどうしても今日出したかった……。

猫の声

薄暗い路地

汚れたゴミバケツの横

腐った臭い

虚ろな目をした子猫

暗く 冷たい

夜の雨

捨て猫は震えているだけ

猫は何も知らない

温もりも

幸福も

だから求めることもない

ただ

目を閉じたとき

浮かぶ景色がある

太陽の降り注ぐ草原

そこに王がいる

夕日に輝くたてがみ

戦きを呼ぶ咆哮

眩しい程の姿

子猫のまぶたの裏

夢の輝き

汚れた路地に生きる子猫

小さな牙をむいても

声を張り上げても

戦く者はなく

ただ 嘲笑わらわれるだけ

ただ猫だけは気付いていた

自分の中に

同じ血が

同じ遺伝子が

眠っていること

それが叫んでいることも

ライオンになりたい

草原の中で

風に吹かれる覇者に

大地を轟かす

誇り高き

唯一の王者に

笑わせはしない

でも

いくら目を覆っても

いくら耳を塞いでも

風が吹くたび

息をするたびに

この場所の臭い

何かの腐敗臭が

猫を 現実

引き戻す

汚れた

ずぶ濡れの子猫

小さな小さな細い声は

涙まじりの

悲しみの咆哮

「ライオンになりたい」。

このワンフレーズを入れたくて作った詩です。

暗い路地裏。

そして鼻につく腐敗臭。

それでも、生きていかなければならない子猫。

今ここにある現実と、さして変わらない気もします。

相棒へ

仕事の合間

故郷と違つ

濁つた空を見上げる

何故だろう

空が妙に遠いんだ

夢を描いて

切符を買つた

光を目指して

ここにきた

なのに 思ったより

壁が大きくて

「明日がある」なんて言葉で

ごまかしてるんだ

欲しかったのは これじゃない

こんなんじゃない

でも また 「今日」が始まってしまっんだ

時間がないなんて

言い訳を繰り返して

自分が頷くはずもなく

流されているだけの

自分が悔しくて……

強くなるため

飛び出した

力が欲しくて

ここにきた

なのに 無力さだけが

この手に残る

愛しい人も守れぬ僕に

夢がつかめるわけもないんだ

欲しかったのは

金や権力ちからや名声なまえじゃない

ただ 夢を見ていた

ガキっばい夢を肴に

飲み明かした日々

あの時 僕は

輝けていた

おい 相棒

お前は今 何してる？

こっちの気も知らないで

突っ走りやがって

なあ 俺はどうすればいい？

どうすれば

お前が誇れる

俺になれる？

こんなこと聞いたら

また笑うんだろうな

俺は今

お前に会いたい

なあ相棒

お前

今

何してる？

昔使っていた古いノートを開き、この詩を発掘しました。

いつ書いたのか、どうやって思いついたのか、もう忘れてしまいました。

だから、この「相棒」が誰なのか、さっぱり思い出せません。

ただ、頭をよぎるのが何人か……。

もし仮に、その中の誰かと再会することがあったとしても、ゆずの「連呼」を思い出す（もしくは思い出される）ことがなければいいなと思います。

相棒へ（後書き）

P.S.

「連呼」を知らない人は聴いて下さいな。笑

ちょっと悲しいですけど、いい曲です。

最悪の記憶

後悔ばっかの人生

この道は間違いだったなんて

いつも思ってる

もううんざりだ

後悔してる自分に後悔して

そんな無駄なことを繰り返してる

可愛いあの娘を 泣かしたこと

皆の前で 泣いてしまったこと

調子にのって馬鹿をやったこと

どれも人生最悪の記憶

「でも今じゃ良い思い出」

そんな日が来るはずさ

どうして嫌なことばかり

思い出してしまうんだ？

きっと同じくらいか

それ以上に良いこともあったはず

今も起きてるはずなんだよ

謝ったら許してくれた あの花

皆して慰めてくれた あの日

最後に皆で笑った あの時

そんなことを思い出したんだ

可愛いあの花を 泣かしたこと

皆の前で 泣いてしまったこと

調子によって馬鹿をやったこと

どれも人生最悪の記憶

でも今じゃ良い思い出

そんな日も来るさ

良かったことも悪かったことも、それなりに覚えていたりします。

というか、きっかけさえあればいつでも思い出せる、といった感じでしょうか。

そして何より、鮮明に浮かび上がるのは、恥ずかしい記憶。

何度も同じ場面を思い返しては、一人でイライラしたり、苦笑いを浮かべたり……

「俺の馬鹿野郎！」なんて言ってみたり。笑

まあともかく、きっと「良い思い出」になる日も近いでしょう。

（ ; ）

48期生の唄

なんだか淋しいよ

人気のない校舎
ひとけ

僕らの母校は 風が中を歩くだけ

僕らのサインを見る人は

もういない

時々 近くを歩いてみると

校庭の木々だけが生きているんだ

俺達の母校の名前

ついに消えてしまった

今までは駅の案内に書かれてたのに

そこに今日

黄色いテープが張られていたんだ

馬鹿だったなあ

でも楽しかったよな？

できるならあの頃に帰りたい　なんて思っちゃったんだ

今

あの机は何処にあるのかな？

誰が使っているんだろう

それともすでに

燃え尽きているのかな……

僕だけなのかな？

いまだにあの頃が懐かしいのは

皆と会いたいの

みんな“交差点”から離れていく

そう 僕も

思い出になっちゃったんだね

僕は少しだけ後ろを振り返ってるよ

あの教室は不思議な場所で

いろんなことが起きたっけ

たいてい笑いになったけど

今思えば凄いこと

仲良かったよな

そりゃ馬の合わない奴もいたけど

楽しい日々だった

今

あのボールは何処にあるのかな

お気に入りだった

バスケットボール

生意気なあいつらが使っているといいな

帰り道

いつもの道を通ってみたよ

三人でずっと通っていたね

僕らは君と歩きたくて

君に追いつくように

君が追いつくように

歩いてた

家に着くまでずっと 君を探した日もあったんだ

馬鹿だったなあ

偶然の振りをして

できるなら これがずっと続けばいい なんて思ってた

あの時は全てが面白かった

今とは違って

学校がなくなつて

思い出だけが残つてゐる

僕は少しだけ

振り返つてみよう

少しだけ

漂つてみよう

あの日の中で

これはリアルです。笑

それでなんとなくこの詩を載せるのを躊躇っていたのですが、友人からリクエストを受け、「んじゃあ載せてみるかあ！」と決意し、更新に至りました。

まあ小っ恥ずかしいので、あんまり詳しいことは言わんでおきます。
笑

風の如く

人と人とで 関わる中で

言っではならぬこともある

真実を口にして傷つくのが 怖いから

とつさに黙った弱者

本音で生きるべきなのか

建前^{ウン}で上手にかわすのか

きつと賢く生きるなら

迷う意味すらない場面

でもどうしても ためらう人が ここにいて

そんな姿を 知って猶

気付かぬ振りで 過ごすのか

風にでも なったつもりで生きるのか

首に巻き付く鎖さえ

気付かぬ振りで済ますのか

そんな自由はないだろう

お前はただの 「ヒト」 なのだから

逆らいたい訳じゃなく

ただ自由が欲しいだけ

なんて言っても

その違いさえ分かってはいないんだ

しがらみから逃げたくて

足掻いてもがいて

どこかに転がろうとしていた

輝ける未来の方へ

どこにも行けはしないのに

そのことを 知って猶

ただ闇雲に 突き進むのか

あの星に手を延ばしたままで生きるのか

地べたに張り付く 自分の姿も見もせずに

自分を騙し 強さを願う

お前はただの「ヒト」なのだから

風の如くに生きるのか

星を目指して進むのか

縛られたまま

張り付いたまま

空を見上げる

ただの「ヒト」

『風にでもなつたつもりで生きるのか
首に巻き付く鎖さえ

気付かぬ振りで済ますのか』

このフレーズがすごく気に入っています。笑

「所詮所謂只の人」といった感じの詩ですが、その同じ「ヒト」が世界中で様々な「すごいこと」（すごいもんはすごいと言っしかないでしょー！笑）をやらかしていることを考えると、そう悲観的になることもないのかもしれない。

真夏のあの日

全てを焼き尽くす光

大地を震わす轟音

あの日

ヒトは一線を越えてしまった

あの日

ヒトは地獄を知った

あの日

ヒトは許されない罪を犯した

数多の命が

容赦なく 踏みにじられ

空に消えて行った

何の意味があつたのだろう

あの戦の後

一体何が良くなつたのだろう

少し考えてみないか？

あれから

ヒトの間に生まれたのは

安心なんかから程遠いもの

明日の空を壊す

刃

数多の戦が

沸き起こり

ヒトを飲み込み

消えて行つた

何の意味もなく

消えた灯

あの戦の中

一体何が生み出されたのだろう

少しも変わらない世界

絶望に向かって歩く

流れの中で

希望を生み出すのは

武器なんかじゃない

全てを焼き尽くす光

大地を震わす轟音

あの日の前からずっと

あの日の後もずっと

ヒトは罪を犯し続けてる

戦は続いてる

「ヒロシマ」「ナガサキ」は昔話ではない。

今回のコメントはこれだけにしておきます。

田中 遼

迷い人

迷い込んだ旅人

地面に伏し 助けを求めている

見て見ぬ振りで 人はその横を 行き過ぎる

旅人は知っていた

誰も差し延べる手を持たないと

彼らには その意志すらない

ほんの少し離れた場所に

絶望してる人がいるのに

関係ないと 顔を背ける

僕らは無関係じゃない

この時

この場所で

一緒に生きてるから

どちらかが消えないように

手を貸せるはずなんだ

旅人に手を差し延べた 優しい人

しかしその人は

また一人

傷ついた人を見つけてしまった

いつも

いつでも

助けを求める人が多すぎて

一人では世界は変えられない

僕らはどうして他人に頼ってしまうんだろう

自分でなんとかしなきゃならないはずだ

きっと世界はそうして変わる

一人で全ては救えない

一人で世界は変えられない

それでも

一人ずつが歩きだしたら

一人ずつが変わったら

それが世界を満たしていくんだ

「一は二ではない」

「でも、「無限」でさえ、一の積み重ねである」

まあ、誰の言葉だか忘れちゃったわけですが。 f (^ _ ^ ;)

でも、この言葉は覚えています。

傷つけた人

ほんの少しの道のりを

ほんの一瞬振り向くだけで

耳に聞こえる 誰かの痛み

それは確かに

僕が傷つけた人の声

あの日

あの時

あの言葉

あれで

あんなに

泣いたあの人

「貴方の傷を 常に抱えて生きていく」

そんなに強くない僕は

ほんの時たま

そして時々

思い出すだけ

気付かずに

傷つけた人

やむを得ず

傷つけた人

そして

他の誰でもなく

僕のせいで

傷ついた人

あの日

あの場所

あの答え

上げて落として

傷を増やした

何を願えども

今更何も出来はしない

今では僕が

「過去」とか「思い出」であれば良い

ただ一度

謝りたいとは思ってる

何人も何人も

傷つけた人がいる

何回も何回も

傷つけた人もいる

全て覚えてはもらえないけど

忘れられない

人がいる

つい最近、満員電車で見かけた人が、少し「あの人」に似ていました。

雰囲気がいぶ違っていたので別人だとは思いますが……。

妙に鮮明に思い出してしまいました。

独り 真夜中

何が足りないんだろう？

自分でも分からないよ

それなりに楽しんで

笑って

毎日を過ごしてる

幸せとまでは言えないけど

不幸と言えば大袈裟過ぎる

そんな毎日の中

ふと目が覚めた 真夜中

突然 携帯を手にとる

襲い掛かる孤独

計り知れない恐怖

自分の鼓動が苦しいんだ

何を待ってるんだろう？

自分でも分からないよ

それなりに友情も

愛情も育んで来たし

今更君に未練はない

なかったことには出来ないけど

前には進めたはずなのに

こんな真夜中

ふと頭の中浮かぶのは

君の姿

もしかしたら今この瞬間
君が……

なんて考えてみるんだ

元気かな？

逢いたいな

逢えるかな？

無理だろな

話したいけど

僕も君も

少し離れ過ぎてしまった

逢いたい時に逢えるような

二人には戻れないんだ

夜が明けるまで

携帯を見つめていた

黒い画面は

朝日を跳ね返して

光りはしたけど

自分で輝こうとは

しなかった

こんな夜がごく稀にあったりなかったり……。

眠れない夜というのは、どうしてあんなに長いんでしょう？

そして、案外眠たくて何もする気になれないという、真可笑しい状況。

で、気付くと寝てるんですから、考えすぎるのが良くないってことなんですよね？笑

ピリオド

二人の時間が終わった時

僕らの目に涙はなかった

景色を風化させるより

すぐに壊してしまった方が

きっと楽だから

愛や恋

ここではもう

そんな分かりやすい言葉は

見つからない

でも友情というと

何かが違う

他の誰でもなく

二人で打った「ピリオド」

痛みも傷も

軽いものではないけれど

きっと正しい結末なんだろうさ

少し残った未練に触り

君は微かに微笑んだ

「しょうがないね」と笑った顔は

僕の好きだった

その人だった

君も僕も

変わらずにいられると思ってた

砂に刻んだ「I LOVE YOU」も

そこに並んだ足跡も

なにもかも

当たり前だけど

もう消えた

何も残ってないのに

心だけがあの夏に

置き去られている

終わりではない

始まりもしない

ケリをつけ損ねた二人

何がなんだか

分からないままだけど

今もまだ

途切れた夢の

続きを

探してる

他の誰でもなく

二人が望んだ「ピリオド」

正しいことは分かってた

分かってたのに

ただ君が大事だった

そんな理由で

僕が迷って

「コンマ」になった

別れたけど、相手のことが嫌いになったわけではない。

そんなシチュエーションです。

「『・』が『』になった」という部分、無性に気に入っています。
笑

苦しみの生

生きることは

苦しみだと聞いた

それなら何故

人は生まれた

いくら希望をつむいても

いくら光を探しても

それは踏みにじられていく

毎日のラッシュアワー

絶望を生むのは簡単で

ただ 世界を見ればいい

そんな所に住んでいて

何を手に

何を胸に

生きていけばいいのか

僕には分からない

生が苦しみだというのなら

それなら何故

僕らは生きている

いくら頑張っても

歯を食いしばっても

涙が止められなくて

空も滲んで見えない

光はあっても夜の向こう

ここまで届くはずもない

そんな空の下にいて

何を見て

何を感じて

生きていけばいいのか

感じるのは

冷たさだけ

生きることが

苦しみだと聞いた

それなら何故

僕らは生まれた

はい、真っ暗です。笑

確かインドの辺りの宗教で、「生が苦しみである」「そして人や生き物は生まれ変わることによって、生を無限に繰り返す」「それから逃れるために悟らなければならない」というようなことを言っていたような気がします。

それを聞いたときに最後の一言、

「それなら何故、僕らは生まれた」

ということを思いました。

まあ、ただそれが言いたいがための作品でございます。笑

同時更新の「生きてはいた。」の十二話で、主人公が似たようなことと言っていますので、もし興味があればならそちらもご覧下さい。

雨

さよならと言った君

別れはいつも

雨の降る夜

それは君の決まりなの？

大事なことを 天気によだね

私のせいじゃない

悪いのはあの空って

それは上手に逃げてるつもりなの？

雨に濡れ

闇に逃げ込む

影一つ

愛に飢え

愛を求める癖に

温もりの温度差に震えてる

愛の重さが違うなんて

冗談にもならないだろ

差し出したよ

つかんでくれ

抱きしめたよ

聞こえたかい

鼓動の音確かに

響いてんだろ

強がる君を知ってるから

この手まだ

離せないよ

さよならを決めた 雨

あがったならば 空は晴れ

あれは恐らく 君のため

晴れの日流す涙

それもいいもんだ

そうだろう？

雨に濡れても

笑っていよう

闇の中でも

輝いていよう

凍えそうな夜に

抱き合っていよう

道の向こうに何があるのか

君と探しに行きたいだけ

良いだろ？

ついて来いよ

君の涙は見飽きたよ

もう一度だけ

試してみろよ

俺はまだ お前を離さない

先のことは分からない

この恋も終わる時が来て

雨が降り出すかもしれない

だけど今

空が開け

君を光が包んでる

壊れることを

恐れていたなら

何も作れはしないから

もう一度

もう一度だけ

俺はまだ お前を離さない

今日起きた時に、枕元に雨の音が響いてきて、「これを更新するしかない！」と思いました。笑

これはヒルクライムの影響をもろに受けた作品です。

作った時にそればかり聞いてたので。笑

良いのか悪いのか、多分に影響されやすいところがあるようです。

まあ、「パクリ」にならんように気をつけます。

RESISTANCE

誰かが

独裁者に対して

立ち上がった時

僕に何ができる？

何をしようとする？

いつでも どこか冷めてる男に

共に戦うことなど

出来やしないけど

せめて 彼らの背中を押したい

いつの時代も

勇気あるものは

世界を変えようとしてる

誰だって

「今」には何かが足りない

知ってるのに

僕は何もしないまま

諦めている

密告者のせいで

英雄が追い詰められた時

僕はどの立場だろう？

何の役を演じるだろう？

いつでも

一番臆病な男が口を滑らす

まさか僕がそうなのか

いつの時代も

勇敢な者は

後ろから襲われる

誰だって

生きたいと思うけど

臆病者は

必死で生にしがみつく

いつの時代も

勇敢な者は

世界を変えようとする

いつの時代も

臆病な男は

変わる世界に流されていく

生きていたいのか、単に死にたくないだけなのか

似ているようで、決定的に違う。

勇者と臆病者の差はそこにある。

ライオンの空

都会の真ん中

灰色の街

アスファルトに囲まれ

区切られた空

高く高く塔を積み上げて

自分の声も届かない

そんな場所を作り上げた

地べたに 立ちすくむ人は

その向こうをじっと見ている

ふと浮かんだ 金色の獣

王と呼ばれたライオン

草原に生きる彼は

これが空だと気付くだろうか

吠えるべき空を求めて

さ迷うだろうか

夕焼けのアスファルトの街

夕日が世界を燃やしても

どこか冷たい無機質な場所

ここに僕らの居場所など あるのだろうか

温もりを

優しさを

捨てられやしないのに

現実との温度差を

辛く感じることもある

サバンナを生きる 金色の獣

覇者と呼ばれたライオン

彼はその目に 何を映すのだろうか

遙かの地平線は 彼にとっても やはり

届かない高みなのだろうか

王者の声には

似ても似つかぬ

トラックの轟音

低い唸りを上げ

僕の横を掠めていく

久々の更新です。

ちょっと自宅を離れていまして、更新できずにいました。

また評価していただいたようで、ホントにありがたく思っています。

まあわがママを言うと、どれを一番気に入ってもらえたのか教えてもらえたらなあ、と一応正直に言っておくことにます。笑

いや、ホントに題名だけ書くとか、第何話とだけ書いてもらってでも構いません。

出来ればちゃちゃっを書いてってくださいな。笑

よろしく願いします。

田中 遼

闇いの唄

地に飲み込まれそうな夜

疲れ果て

重い足を引きずって歩く

こんな日には

悪いことばかり

思い出す

何も手に出来ない

現^{いま}を見ても

もう一人の僕が

嘲^{わら}笑ってる

「お前に未来はない」

「そのむなし手がその証」

「お前は持たざる 者なんだ」

彼の言葉を防ぐ

手立てはない

僕が思った

声だから

でも

生きていかなきゃならない

死ぬにはまだ早過ぎるから

「僕はこの日のために生まれた」

そんな日を 夢見ながら

歩きながら考える

かつて

心に

すぐそばにいた人

でも現在^{いま}は

そして未来^{みらい}にも

いない人

とつくに諦めてるはずなのに

いまだに過去に囚われてる僕

いつまで引きずりやいいんだ

頭と心が同じなら良いのに

どうしても考えてしまうんだ

でも

歩きださなきゃならない

何かを得るために

「僕はこの人のために生まれた」

そんな人を望みながら

死ぬにはまだ早過ぎる

僕はまだ

何もしちゃいない

何も得ちゃいない

「僕はこの時のために生まれた」

「僕はこの人のために生まれた」

そんな日のために

信号待ち

握り締めた拳

ただ前を見つめる瞳

そして意味もないファイティングポーズ

でも 僕は

本気で闘うつもりでいる

信号が変わり

僕は歩き出す

目指すのは

ただ一つの意味

いったん作り終えた時、「僕」は「その日」を「待ち続ける」「
だけでした。

そうじゃないだろうと思い、結局「意味のないファインディングポ
ーズ」をとったり、「本気で闘う気」になったりする、「闘いの唄」
になりました。

結構気に入ってます。

メツキ

一体いつから決め付けたのか

心を動かす言の葉が

考え

考え

出来上がる

飾り立てた台詞だと

それで言葉をこねて ひねって いじくって

メツキみたいな輝きと

おもちゃみたいな煌めきを

作り上げた

自分の細工に酔ってた僕は

ちよっぴり気取って鼻高々に

そのまがいもんをばらまきだした

「凄いだろ？ この輝き！」

「本物の黄金さ！」

「買ったなら今、今しかないぜ？」

「後悔はさせないよ」

でも今しかし

僕の手元に 積み上がった

在庫の山

分かってたはず

人はそれほど愚かじゃない

自分も騙せぬ代物に

他人^{ひと}を騙せるはずもない

本物があれば

それだけで良いのに

また小細工を繰り返す

僕がいる

「なあ誰か」

「誰か買ってくれよ」

「この輝きが見えないのか？」

「この価値が分からないのか？」

壁の落書きに

真実の輝き

僕のメッキは

たちまち崩れて力をなくす

残骸と成り果てたそれは

見るも無惨な姿をさらけ出した

そして僕は初めて

自分の愚かさを知る

ニューヨークの壁の落書きに、こんなものがあるそうです。

「心はパラシュートと同じで、開かない限り役には立たない」

正直、自分の「メッキ」では、とても敵う気がしません。

北極星

君が僕を去ったのは

ひどくもつともな理由^{わけ}だった

君が僕を愛してないから

僕が君を愛してないから

嫌いになった訳じゃなく

ただ終わったんだ

涙だって儀式みたいなもんさ

悲しむ時間は終わったはず

あの星に導かれ

君が始めた新たな旅路

僕は「^{ゴール}目的地」にはなれない

同じ場所を目指すことも

二人がもう

並んで歩くことはない

君が僕を去った後

ひどく虚ろな場所が出来た

二人で過ごした部屋の中

そこに残った僕の中

悲しくはない

痛みもない

ただからっぽなだけ

時が過ぎ

君を導くあの星が

何処かに消えてしまつかもしれない

それでも君が

迷わぬように

僕は変わらずにしよう

いつでも空にある

ただ一つの北極星

人は変わっていくもの

星も燃え尽きる時がくる

恋にだって終わりが付き物

でも僕は

変わらずにいたい

何が出来なくてもないけど

ただ君が迷わぬように

北の空で

輝いていよう

未練だかなんだか

知ったことじゃないけど

今はただ

君の航海の

無事を祈る

「今はただ君の航海の無事を祈る」と「僕は変わらずにいたい」
これを書きたかったんだと思います。

前者をするイメージで、「不変」なもの……

「北極星」！

という感じかな……？　うろ覚えです。笑

一人ぼっちの「I love you」

高い高い

空の下で

公園のベンチに 座ってた

一人ぼっちで座ってた

碧く澄んだ

空の下で

小さい子どもが

はしゃいでる

体中で 笑ってら

大きな声が聞こえてくるけど

余計に独りになった

僕に話し掛ける

君がいないから

I l o v e y o u

君はもういないけど

言葉だけが響くけど

言わせてほしい

誰よりも

そう誰よりも

顔を上げると

夜の闇

満月が僕を見下ろして

僕の中を 照らした

月の光が

静かな夜が

冷たい風が

孤独な僕を

締め付ける

I l o v e y o u

君に届くことはないけれど

もう遅いと知ってるけれど

忘れられる程

器用じゃないから

この夜空に呟くよ

誰も聞いていない

僕の気持ちを

君への想いを

月に向けて呟くよ

独り言みたいに 呟くよ

I l o v e y o u

人生で初めて作った「ラブソング」で、「ほぼ」作った当時のままです。

この頃、僕は「尾崎豊」も「Mr・Children」も「Queen」も「BUMP OF CHICKEN」も知らず、「The Beatles」も「ゆず」も「多少聞いたことがある」程度でした。

ここまで書いて、自分が何を言いたかったのか忘れちゃいましたが、

ともかく、好きな詩です。

T r a g e d i e s

いつもいつでも

側にいたのは俺だった

君と誰かの終わり

エピソードとプロローグの間で

君をなくさめる 第三者

また 君が泣いている

相手の消えた舞台の上で

王子様に置いていかれた お姫様

「ハッピーエンド」なんて

ありきたりだって言うけど

君の演じる 悲劇だって

もういい加減 飽きてきただろ

いつまで俺は ここにいるんだ

このままじゃ俺まで巻き込まれちまう

今まで俺が

近づけば離れた癖に

何故今

身を寄せてくるんだ

君を愛したくはない

止まれなくなる

なあ お姫様

俺にそこに

その悲劇の舞台に

上ってこいと言うのか

まだ足りないのか

どれだけ泣けば気が済むんだ

何故か 悲劇を望む お姫様

そんなつもりはないって言うけど

きっとそうなる

君はいつも いつだって

そういう道を選んできたのだから

君を愛したくない

その気がなくなっちゃって

俺は全てを奪われてしまう

だから

だからなんだ

君を愛したくない

俺は悲劇なんて見たくない

君を愛したくない

ラスト
結末はもう決まってるんだろ

結局

俺に選べる道はなく

俺は舞台の上に立つ

君を愛したくない

そんなことを言いながら

舞台の上のお姫様は

それを聞いて微笑んだ

「もう手遅れよ」

「あなたも」

「私も」

もともと「I Don't Wanna Love You」というタイトルでした。

本文の「愛したくない」という部分で、それは「Hobastank」というアーティストの「I Don't Think I Love You」という曲の歌詞を見て、何となく浮かんだフレ

リズムだったんですが……（ちなみにその歌詞の内容はほとんど覚えてません笑）。

「I Don't Wanna Love You」、口に出して
もらうと分かると思うんですが、リズムが非常に気持ち悪い（
| ^ ; ）

まあちよいちよい手直したら「悲劇」という単語が多くなったんで、それをタイトルに決めました。

そして「悲劇」より「Tragedies」のほうがしっくりきたので、ここに行き着いた、というわけです。

……蛇足でした。

久々の更新でちょっと張り切ってます。笑

流れ星

一人夜空を見上げ

星を探した

真夜中の駐車場

都会じゃたいしたものは見えないけど

それでも光はそこにある

ふと思って

「星に願いを」

口笛で吹いて

夜空が滲んで

無性に帰りたくなつて

戻れない場所に

戻る道を探してるんだ

願いをたくした 流れ星

一瞬の輝きを

一晩中探した

叶わない夢でも

上を見上げれば

涙もこぼさずにすむだろ

いつか共に見た空

あの時

星は見えなかった

流れた星に

「もう一度」と願っても

いつでも

星が燃え尽きる方が

ずっと早いもの

見えるものと見えないもの

知らないものと知っているもの

どちらも僕の周りに落ちていく

些細なものが

一瞬の光を放ち

人の心をつかむ

塵が流れ星になれるなら

僕もいつかは輝けるはず

一瞬の流れ星に

願いをたくした流れ星

一瞬の輝きを

一晩中探した

またまたノートにいつの間にか書かれていた詩の掲載です。

「あんまり考えてないのがよく分かる」と言うか、「実によく分からない」と言うか……。 f (^ | ^ ;)

まあいちいち変更したりするのも面倒なので、そのまま載せさせてもらいます。笑

君といた夢

また君の夢を見た

夜明けと目覚めの狭間で

起きてからもしばらくは

僕は夢の中にいた

誰かが言ってた

「夢に出てくるのは 君に会いたがってる人なんだ」と

それがホントだったら 良いのに

そして

ホントだとしたら

ねえ僕は　もしかして

君の夢^{とこ}にお邪魔してるのかなあ？

だとしたら　ごめんな

君を困らせてるんだろうな

目をつむってくれて言っても

君も眠ってるんだっけ

だからせめて

その眠りが安らかでありますように

「諦めた」と

口に出したその日に

君の夢を見る不思議

自分が一番

自分の嘘を知っている

ホントは正直でありたいんだけどなあ

ねえ僕は　もしかして

ずっとこのままなのかなあ？

夢に見るだけで

満足した振りをして

自分を騙して

笑ってみせて

自分で暴いて

悲しくなって

分かり切った真実

夢は夢でしかないって

だけのこと

ねえ僕は いつまで

この朝を覚えていられるかなあ？

この幸せな時を

光に満ちたこの瞬間^{とき}を

そして同時に

悲しくて

切ない

そんな時を

忘れたくないのに

望まない現実が

僕を飲み込んでいく

ねえ僕は　いつかまた君に会えるかなあ？

「会えると良いのになあ」

夢から覚めた僕は

ただ

そう呟いた

一気に作りました。

そして、即公開です。笑

「夢」系の作品が多くなってきたような気が……。

そろそろネタ切れですかね？笑

バリア

君と僕

二人の間に

薄く見えない

そして確かで

強固な

壁がある

超えられず

壊せもせず

僕はピエロのように

見えない壁に張り付いた

たった一人の

観客は

笑いの代わりに

涙一つ

その場で落つことした

「ゴメン

この壁は壊せない

今の今まで

「サヨナラ」のない

恋はなかった

また傷つくくらいなら

死んだ方がまし」

知ってるさ

僕がここ

壁の向こうにいる間

君が選んだ「サヨナラ」が

何度も君を

傷つけたこと

涙を流し

傷を濡らして

君はバリアを

強くしていく

でも一度だけ

僕を試して欲しいんだ

君の望んだ「永遠」を

神に誓える訳じゃない

「絶対」の恋なんて

しんどいだけだろ

ただ

ここにあるのは「真実」で

僕はただ

君に触れたいだけ

「特別」になれるかは

分からないけど

涙さえぬぐえない

この僕に

君を抱きしめる

資格はなくて

今もまだ

パントマイムを続けてる

僕には

かすり傷さえ

つけられなかった

君のバリア

その壁の向こうから

君が手を

重ねてくる

今

僕は初めて

君のぬくもりに

たどり着いた

いやあ、今年は頑張った。笑

人から見れば「停滞」とか「後退」ともいえる年でしたが、自分の中では確実な「進歩」と「確信」を獲られたと思っています。

多分。笑

では来たる2011年も、この「楽譜のない歌たち」をよろしくお願ひします！

田中 遼

ボタン

なんだか最近

つまなくて

よく昔のことを思い出すんだ

難しいことなんか

何にも知らなくて

ただ楽しかった日々

もう戻らない日々

人生に巻き戻しボタンがあれば

すぐにそこに帰れるのに

でもそんなものがある訳はなく

僕らの日々は流れていく

何故だか最近

苦しくて

「今」が終われば良いと思うんだ

きっと未来には

もっと良いことが起こるはず

そう信じて

今日もなんとか生きてるけど

人生に早送りボタンがあれば

すぐにそこに辿り着けるのに

でもそんなものがあるはずがなく

僕らの日々はゆっくり進む

ホントは

一つだけ

僕らはボタンを持っている

苦しみや退屈から

脱出可能な

一つのボタン

でも僕は

それを

押さない

パソコンから発掘した詩です。

てっきりとうに掲載したと思っていたんですが、見たところ未掲載のようで少し驚いています。

ホントに既出じゃないですよねえ？笑

何のために生きている

右も左も

人の山

誰もが疲れ切った顔で

吊り革を握ってる

月曜日の朝

安らぎとは言えない

一応の休息を背に

俺達はまた

暗い

重い

この日常に漕ぎ出した

行き詰まり

止まってしまった俺達は

横のあんに

いやむしろ

自分自身に

問い掛けなきゃならない

何のために生きているのか

答えられないのはどうしてだ

生きること

意味などないとほざくなら

死んじまっても

同じだろうが

右も左も

うかがって

はみ出さずにいることを

ひたすら目指す

こんな世界に誰がした

人は誰でも

自分自身であるべきなのに

それが出来ない

不幸な世界

俺達はただ

幸せでありたいだけだから

横のあんたに

いやむしろ

自分自身に

問い掛けなきゃならない

何のために生きているのか

幸せなんて

普通に生きてるだけで

手に入るものじゃないのか

いつからこんな

得難いものになったのか

死にたい訳じゃないけれど

妥協して生きるより

貫いて死ぬ方が良いから

馬鹿と思える道を

選ぶ時もある

何のために生きているのか

答えられないのはどうしてだ

死んだ方がマシだと歎く前に

あなたはホントに生きているのか

何のために生きているのか

答えられないのはどうしてだ

偉そうに言う俺は

多分

一人で

空しく

死んでいくだけ

それでも

こっで

この人ごみの中で

もう一度

問い掛ける

何のために生きているのか

答えられないのはどうしてだ

死んでも良いと本気で思うことがあります。

愚痴をこぼし、不平を言うだけの人生ならば、です。

でも、「生きるため」というより、「生き延びるため」に、その道を押し付けられることもあります。

そんなことに意味があるのでしょうか。

僕には分かりません。

ただ一つ、（かなりカッコつけて）言える事があります。

「手元のワンペアにこだわる奴には、ロイヤル・ストレート・フラッシュは絶対に作れない」。

何のために生きている（後書き）

P・S・

B・Zの「Motel」にこんな歌詞がありました。

「ひとりじゃないから 汚れながら生きてる」

多分、そういうことなのでしょう。

ずっとずっと

「……久しぶり。元気だった？」

何年も会ってなかった

その姿

会わない間

僕は君の影に恋した

そこにいた君に

ずっと思い描いていた

愛しい君

けど今

その全てが崩れさる

思っていたより

ずっとずっと

素敵な君

僕にとっての

「パーフェクト」

僕は君に恋してる

この胸が

ありえないほど

高鳴って

抱きしめたくて

僕は君を見つめてるんだ

この腕が

君を求めてる

もっと可愛く変わった

愛しい君

そう今 僕は

全てを捨てられる

想像したより

ずっと ずっと

簡単だった

僕は君の手を取った

「僕は君を愛してる」

思っていたより

ずっと ずっと

素敵な君

僕にとっての

「パーフェクト」

僕は君に恋してる

想像したより

ずっとずっと

簡単だった

僕は君を抱きしめる

君は

僕の手の中で

笑って

泣いた

かなり前から、「これを100個目にして、「楽譜のない歌たち」を完結させよう」と考えていました。

作ったのが（PCに残っている記録では）2009年ですから、随

分と暖めてきたもんです。笑

これは、授業で読んだ村上春樹の短編「四月のある晴れた朝に10パーセントの女の子に出会うことについて」という小説のことを考えていてひらめいた詩だったように記憶しています（確か）。

まあそれはともかく、これで「楽譜のない歌たち」完結です。

全体的な後書きは次話に載せます。

では。

後書き

最初に言わせて貰います。

「ネタ切れ」ではありません！笑

でも、とりあえず「楽譜のない歌たち」はここまです。

「楽譜のない歌たち」。

うん、実にいいタイトルだ！笑

かなり気に入っていて、出来ればずっとこれを通していきたいな、とも思ったこともあります。

しかし、60話あたりから「こんなに長くしても、なかなか見る気にならないだろう」という風を感じながら更新していました。

まあ、モチベーションがあんまり上がってこなかったというか……。

それでも、「ずっと ずっと」に書いたように、「100話」を先に決めていたので、そこまでは頑張るつもりでした。

ただ今日、ふと思いました。

「そんなことに意味はないだろ」。

今まで散々「テキトー」にやっておいて、最後だけきっちり締めようとは、実に馬鹿馬鹿しい。笑

こういう公開方法自体が「自己満足」でしかありませんが、そんな変なこだわりは、その極みと言って良いでしょう。

そんなわけで、気も進まなくなってきたことだし、さっさとやめちまうことにしました！笑

「楽譜のない歌たち」に匹敵するような良いタイトルが思いついたら、すぐにまた詩の投稿を再開したいと思っています。

ですので、また見かけたらぜひ立ち寄ってくださいませ。

では、ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

田中 遼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711e/>

楽譜のない歌たち

2011年2月2日12時22分発行